
秋花火を君と。

紅崎 夏妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋花火を君と。

【Nコード】

N1327I

【作者名】

紅崎 夏妃

【あらすじ】

七藤嶺が、恋をしたのは、8歳年上の花嫁、莉音。飲み会の帰り道、思わず、キスをしてしまう嶺。拒まぬ莉音。逢うのが、ほんの少し早かったら。嶺は、友人にとめられながらも、莉音と生きる事を選ぶが、周りを傷つけていく2人。嶺は、苦渋の決断をし、莉音と別れるが、生死を彷徨う事故に、莉音を失えない事に気付く。

花嫁に恋する。

僕が、莉音を、初めて見たのは、大学を卒業して、入社してすぐの、転勤で新しい職場に案内された時だった。

「はじめまして、英莉音です。」

パソコンに向かっていた莉音は、手をとめ、こちらに向かって頭を下げた。数週間後に結婚を、控えてる莉音は、他の女性達とは、違って、僕には、目もくれず、データの入力に、忙しそうだった。

・・・結婚するのか・・・

その時、僕は、何も気にとめなかった。彼女が、僕より、8歳年上とか、結婚するとか。その時の僕には、地元に残してきた彼女がいたし、誰よりも、彼女は、僕に気がなさそうでは、ないか。でも、その時、もっと、彼女に、近づけるよう努力すれば、良かったんだよね。ひきとめれば、良かったのかもしれない。だって、僕の手の届かない所にいつてしまうんだから。

・・・今の生活は、捨てれない・・・

莉音は、僕に言った。

「そうだよ」

僕は、冷静を装った。何度も、頭の中で、繰り返したんだ。この別れは・・・もっと、僕に勇気があれば、莉音を、奪う事ができたのに。この時に、戻る事は、できない。余りにも、僕達の恋は、周りを傷つける。

「へえ・・・。夫婦別姓なんだ」

同じ職場の、加奈子が、ハシヤギながら、新婚旅行土産を配りにきた莉音を、ひやかした。あれから、数週間が、過ぎていて、七藤嶺が、莉音を目にしたのは、結婚式を終え、新妻になったばかりの初々しい姿だった。嶺はと、いうと、学生時代から、付き合っていた彼女、美央と遠距離だった事もあり、別れる別れないで、もめてい

た嫌な時期であった。

・・・別れようか・・・

呆然と、嶺は、考えていた。若いという事もあり、そんなに、美央を失いたくないと思うまで、好きでは、なくなっていた。10代からの恋なんて、こんなものだろうか・・・。美央と一緒にいるだけだ、いろいろ楽しかった。今も、そうだろうと思いついていた。今は、新しく変わった環境になれるのに、必死で、寂しいからと、メルをよこす、美央をわずらわしくさえ、思っていた。新しく、やり直すのに、いいかもしれない。そう思っていた。

「七藤君、どうぞ」

莉音は、嶺にお土産の、チョコを差し出した。

「あつ、すいません。俺、甘いのが、目がないんです」

嶺は、恐縮しながら、手を出した。

「初めて、ですよね？」

莉音は、笑っている。両側に、笑窪が、見えた。

「何が？ですか？」

「こうやって、話すの。結構、後輩達に、人気あるんだから」

「初めてじゃないですよ！。俺、赴任してきたばかりの時、挨拶したじゃないですか？」

「そうだった？あつ！ごめん」

莉音は、笑った。

「ごめん。ごめん。あの時は、締めが遅れてて、あせってたの。七藤君の職場の完成検査とあたしの購入課は、ライバル同士だから、今後共、よろしくね。」

莉音は、嶺をみつめ、にっこりと微笑んだ。その笑顔を、曇らせるのは、いつも、嶺になってしまう。

メアドは、君から・・・。

・・・莉音の笑顔が好きなの・・・

嶺は、よく莉音にメールを送った。

新婚旅行から、帰った莉音に、後輩の美沙が泣きついてた。

「七藤君が好きなの。お願い先輩、仕事でよく話しますよね？協力してください」

人なつっこい顔で、莉音に、ねだった。そのままの、顔でせまれば、十分いけるのに。莉音は、面倒臭かった。あまり、人の面倒を見るのは、好きではない。取りあえず、職場の女子で、唯一、結婚してるまだ、若い？女性という事で相談されたいらしい。まあ、嶺は、なかなか、もてるようなので、1番安心できる所で選ばれたという処か。

「ふえー。面倒なんですけど・・・」

莉音は、本音を出した。今は、落ち着いた穏やかな、旦那とのんびり生活したいのだ。人の恋愛に巻き込まれたくないし、もう、散々である。莉音は、派手な顔立ちのせいで、よく遊んでいると、勘違いされやすかった。ちよつと、男性と話しているものなら、おばさん達の格好な話のネタにされていた。ようやく、知り合えた穏やかな人。この人となら、一緒にくらしていける。31歳になって、ようやく掴んだ穏やかな生活。莉音は、嶺と関わる事で、穏やかな生活が、崩れてしまうような嫌な予感がした。

「そんな事言わないで下さいよー。先輩は、自分ばかり、幸せでいいんですか？」

「はー？」

美沙は、暴挙にでた。

「飲み会を設けるとかー。なんなら、仕事。ほら、報告書とか言って、メアド聞くとか？」

「はー？ますます、まずくない？あたし、人妻なんですけど？」

「まあ、まあ！先輩なら、大丈夫。」

てな、訳で、莉音は、嶺のメアドを聞くはめになった。

「ちえ！」

莉音は、小さく舌打ちした。確かに、嶺と2人で、検査報告書を出すため、実験室にこもる時がある。だからと、いつて、突然、メアドを聞いたら、嶺になんて、思われるか……。莉音は、納得いかない様子で、データー入力を続けた。

莉音の職場は、広く、そこには、最新のコピー機が置いてあった。そこを、嶺は、よく利用している。コピー機から、真っ直ぐ、突き当たりに、莉音の席がある。嶺は、コピーをしながら、いつの間にか、莉音を、見るのがクセになっていた。

「今日は、いるのかな？」

後ろに、下がって、莉音を探す。10時と3時は、休憩に行っているので、コピーの時間は、ずらす。まるで、ストーカーだな。嶺は、笑った。特別、莉音に感情がある訳では、ない。仕事を一緒にしている内に面白い奴くらいにしか、思っていない。しっかり、しているようで、意外と、ボーツとし、嶺に、指摘だれる事が、よくあった。字もあまり上手では、ない。

「いいの。パソコンの時代なんだから」

嶺にからかわれると、真っ赤になって、怒った。面白い。最近、すっかり冷めてしまった彼女というより、莉音をかまっているほうが楽しい。あまりにも、莉音の背中を見ているものだから、急にふりかえった。

「ちよつと！その人」

莉音が、つかつかと歩いてきた。

「メアド教えなさいよ！ぜんぜん、報告書なっていない」

「？」

「だーからー。メアドってんの」

嶺は、驚いた。周りに、コピー待ちの人が、並んでいるのだ。やましい事は、ないのか？本当に仕事の用件だけなのか？

「何、赤くなってるのよ。メアド何に、使うか、わかるでしょ？」

「早くしろよ！七藤。お前、何考えているんだよー」

コピ―待ちの、同僚が冷やかした。あまりにも、どうどうと聞くものだから、圧倒されて、嶺は、携帯を出し、赤外線をしてしまった。
「いただき！」

莉音は、にっこり微笑んだ。嶺の好きな顔だった。

きっかけ……。

結局、メアドを、聞いてしまった莉音だったが、嶺にも、メアドを教えてしまう結果になってしまった。

……馬鹿だ……

落ち込む莉音に、美沙が、喜びを抑えきれない顔でやってきた。

「せんぱーい！ ナイツですー。いいことありました。」

嶺の、メアドを美沙に教えたのだから、いい事とは、その事であるう。

「ききたいですかー？」

フーンと鼻を鳴らしながら、美沙は、自慢げに言った。

「別に」

不機嫌に応えた自分が、意外だった。

「聞きたくないんですか？」

「ごめん。いま、忙しいから」

嶺から、メールがきて、嬉しいのだろう。実は、挨拶程度のメールなら、自分も来た。でも、それは、敢えて、美沙には、言わないでおいた。

……七藤嶺です。お手柔らかに、お願いします。莉音さんて、意外と抜けてるんですね？……
てな、具合に。

「でもさ。ほんと、名前だけなの。失礼しちゃうわ」

美沙が、見せた画面には、本当に

……七藤嶺です。よろしくお願いします。……
とだけあった。

莉音より、短い。

「確かに、先輩をとおして、無理にメアドきいたんだけど。あまりにも、あっさりすぎる」

嶺の了解を得て、美沙にメアドを教えたのだが、面識があまり、な

いせいか、本当にあっさりした内容だった。

「まあまあ、初めてなんだし。そうそう男が、ダラダラ書かないわよ。今後ガンバルガンバル」

莉音は、あせりながら、美沙を励ました。自分宛の、メールの法が、少し長い。ちよつと、嬉しかった。これから、莉音への嶺からの、思いが届けられるとも、思わずに……。莉音は、嶺へと、少しずつ、距離を縮めていく事になる。

思いをこめて。

仕掛けたのは、美沙だ。

どうしても、嶺と飲みたいと無理やり飲み会をセッティングした。

「どうしても、あたしまで・・・」

莉音は、ぼやいた。今日は、旦那が出張でいない。それをいい事に、実家でのんびり親に甘えるつもりでいたのに、美沙の策略の餌食のなり、今、こうして、美沙の隣、嶺の隣の隣に、ちょこんと座らされている。2人の間におかれて、橋渡しでもしろと、いうのか？ すごい、莉音は、不機嫌になっていた。確かに、美沙は、可愛いと思う。周りのアホな男共は、美沙に夢中という子が多い。いつも、ミニをはいているし、リボングッズは、当たり前、ゆるくまいた巻き髪は、背中まであり、足は細く、胸は、大きかった。何よりも、若い。

「別に、あたしなんか、いなくたって」

莉音は、いつも、美沙が羨ましいと思っていた。黙っていたって、美沙は、誰かが、気にかけてくれる。それに比べて、自分は、オーダーさえ、声をかけないと、寄ってこない。

「ちよつと、先輩。ピッチ早すぎますよ！」

美沙が、あわてて声をかけてきた。残業が続いたあとのビールである。そおいえば、冷酒も飲んだような・・・。

「大丈夫！大丈夫！ちよつと、トイレ」

莉音は、立とうとしたが、上手く立てなかった。そんなに、飲んだつもりは、ないのだが、どうも、冷酒とカクテルを、混ぜたのが、いけなかった。あわてて、美沙に抱えられて、トイレに行く事は、出来たが、とても、このまま、続行して、飲む訳には、行かなかった。

「ごめん。あたし、無理みたい。タクシー呼んでくれる？」

莉音は、自分の体が自分の物でない感じがした。すぐ、タクシーを

よんでもらい、乗り込もうとした瞬間、嶺が、助手席にすべりこんできた。

「ちよつと、七藤君！」

美沙が叫んだ。

「送ったら、すぐ、戻るから」

嶺は、笑った。美沙は、嶺の腕をとり、2次会の算段をしていたのだが、まんまと、嶺に逃げられてしまった。

「車出してください」

嶺は、言った。車は、街を離れ、一路、莉音の実家を目指していた。・・・が、莉音が、少し、落ち着いてくるのを、見ると嶺は、言った。

「もう、少し、飲みなおす？」

下心が、あった訳でなく、嶺は、莉音と少し飲んでみたいと思っただけだと思う。落ち着いた莉音と一緒に、嶺は、街に戻り、別なバーに入っていた。

「大丈夫？」

嶺は、覗き込んだ。

「大分、落ち着いたかな？いつもは、こんな事ないんだけど・・・」
莉音が、微笑んだ瞬間、嶺の顔が、そこにあった。どこかで、小さな悲鳴があがった。ひやかす声も・・・。

嶺に唇が、莉音の唇と重なっていた。ほんの、軽いキスだった。

「ごめん。出ようか。」

嶺は、謝った。何で、謝るの？莉音は、そんな事を思っていた。逃げる様に、店を出ると、駅に向かって2人は、歩き出した。時計は、2時を示していた。

「タクシーないか・・・」

嶺がつぶやいた。

「歩こうか？」

莉音は、言った。駅から、莉音の実家までは、決して、歩けない距離ではないが、かなりある。それでも、2人は、ふざけあいなが

ら、歩き出した。会社では、決して、出来ない2人だけの、時間。莉音は、自分が、結婚している事。つまり、人妻である事を忘れていた。キスは、拒むべきでは、なかったのか……。どうして、不意をつかれたとは、いえ自分は、嶺とキスをして、しまったのだろう。

自分は、夫を思っている筈。莉音は、嶺と歩いていると、楽しかった。嶺が、いろんな事を話しかけてくる。自分が、笑うと、嶺が嬉しそうな顔をする。それを、自分は、見つめ返し、また、嶺が微笑む。

・・・どうして、嶺と一緒にいると、楽しいんだろう・・・
そんな答えは、決まっている。それでも、莉音は、認めなかった。美沙と嶺の、仲立ちをしている間に、自分が、嶺に魅かれていたことを。そして、嶺も、莉音に魅かれていた事を……。ここで、やめれば、誰も、傷つかない。でも、ここで、引き返すな。と、嶺の思いがあったのか、再び、嶺は、莉音の、体を抱きしめていた。今度は、軽いキスでは、なかった。もう、夜明けが、近づいていた。

君求む。

仕事をしていても、身が入らない……。自分は、何をしたのか？判っていた。唇が、覚えてる。

・・・これは、いけない事だ・・・

莉音は、判っているつもりだ。嶺を好きなのかも、知れない。自分が、美沙との橋渡しをしている時、嶺と話す事が、どんなに、楽しかったか。でも、自分には、待っている人がいるし、嶺にだって、可愛い彼女がいる事は、知っていたでは、ないか。

・・・自分達は、大人だ・・・キスぐらいで、こんなに、揺らぐなんて・・・。

莉音は、かぶりを振った。出張から、帰って来た時の夫の顔を思い出そうとしていた。優しい笑顔で、莉音を、みつめていたでは、ないか？自分だって、疲れているのに、夕食を作って待って、いてくれたり、洗濯だって、一緒に干して。これ以上の幸せは、ない筈なのに、どうして、自分は、嶺に揺らぐのだろう。莉音は、苦しくなっていた。

・・・お酒の席の事。はずみよ。はずみ・・・

莉音は、無理に思い込む事にした。

「莉音さん？」

誰かが、話しかけてた。

「？」

莉音が、顔をあげると、そこには、嶺の顔があった。莉音は、目を合せられなかった。

「まったく。」

嶺は、かがんだ。

「罪作りですね。」

莉音の耳元で囁いた。

「届いてます？」

「何が？」

莉音は、赤面していた。

「だから」

嶺は、笑った。

「報告書ですよ。英さんが、できないから、残業になって、帰れないって、女の子達泣いてますよ」

「！」

嶺は、笑いながら立ち去った。そうだ、嶺との事に気をとられ、すっかり、仕事の手間どつていた。それを、原因である嶺に指摘されるなんて。

「もう！誰のせいよ」

・・・ばからしい・・・

莉音は、悩むのをやめた。あれは、お酒のせいだ。そう、思う事にした。誰にも、言えない。このまま、忘れよう。あの後、美沙が、2人で、何処行ったの？とか、いろいろ五月蠅かった。言い訳もせず、

「秘密」

と言って、わざと、謎めいて、ごまかしておいた。

「メールが、こないの」

美沙は、言った。

「誰から？」

莉音は、判っていて、聞いてみた。

「嶺君」

「ふーん。仕方ないんじゃない？だって、彼女いるって、知ってて、狙っていたんでしょ？」

「まあねー。」

いかにも、関心ありませんって、感じで取り繕った。・・・が、莉音には、メールが届いていた。内容は、特別な、ものではなく。今日の夕日が、綺麗だから、観てください。とか、煮物の作り方と

か、些細な事で、メールは、続いていた。このあいだは、カレーの美味しい作り方を聞いてきたが、後から、きたメールには、
・・・結局、友達がきて、ラーメンを食べに行きました・・・
と、あった。

「友達？彼女でしょ」

メールをみた、莉音は、携帯を、ベットに放り出した。

恋心

不倫は、周りを不幸にする。

誰かが、言っていた。そのとおりだと思っていた。でも、そんなのは、自分ねは、関係ない。自分には、美央という恋人がいるし・・・。美央から、頻繁に来るメールを煩わしいと思う事は、あるが、取りあえず、上手くいつている。そう、思っていた。最近までは。メールを知らせる音が鳴る。つい、あわてて、送信元を見ると、美央だったりして、がっかりする。そんな事が続いている。

・・・何故、がっかりする？・・・

嶺も、わかっていた。誰に魅かれ始めているか。でも、それは、気づいては、いけない。彼女には、家庭がある。これから先には、踏み込めない。まだ、新婚では、ないか。落ち着かない日々が、続いていた。美央とは、長い付き合いで、親同士も、互いが、結婚すると思っていたし、自分もそのつもりでいた。もう少し、仕事が、落ち着いたら、クリスマスには、プロポーズするつもりで、お金も貯めていた。

・・・それなのに、どうして・・・

自分でも、わからない。あまりにも、嶺のメールの様子が、おかしいと感じたのか、ついに、美央が、嶺のマンションにたずねて来た。長身

の人目をひく、美人だった。

「何か、作るうか？」

嶺が、声をかけた。あまり、美央は、料理が上手では、ない。１人暮らしの長い嶺が、料理をする事が、しばしばある。

「うん。嶺のカレーが、食べたいな。久しぶりに」

嶺は、黙って、キッチンに立った。こころここにあらず。である。

今頃、莉音も食事を作っているのだろうか。旦那さんのために。ため息が、もれた。

「嶺、最近、変」

後ろから、美央が、嶺を抱きしめた。

「何か、あったの？美央寂しいんですけど」

嶺は、美央をそっと、抱き返した。莉音は、手が届かない人。一緒には、なれない。考えるのは、よそう。自分は、美央と生きよう。

月も、末になり、忙しい日が、何日か過ぎた。莉音も、あの夜の事を、忘れようとしていた。当の本人も、いたって変らぬ様子だし、
・・・ここは、大人の女として、びしっとしなくては・・・。

などと、考えて、異常な程の、テンションの高さで、月末処理をこなしていた。仕事をしていた方が、何も、余計な事を考えないで済む。嶺の事や、旦那の事を考えると、ミスが増えた。

・・・あれは、事故。事故なの・・・

残業も自ら、名乗りでた。・・・と、ここまで、何事もなく、過ぎていった。

「研修にいつてほしい」

「はいい？」

莉音は、隣の県で行われる、研修に、1泊で行く事になった。

「何名か、他の部署から、出席するかもしれんが」

莉音が、出席者名簿に、目を通すと、今は、あまり見たくない名前が・・・。

・・・七藤嶺・・・

「業務命令だからな」

部長が、笑った。別に、嶺との、関係を知って、笑ったのではなく、あくまでも、莉音が、新婚なのに、1泊を渋っているように、見えたのである。

・・・困った・・・

たしかに、他に、何名かは、いる。でも、本当に知らない人ばかりだ。

・・・しっかりすれば、大丈夫・・・

莉音は、命令書を、強く握りしめた。何かが、崩れていく。そんな気がする。

戻れない橋を2人で。

僕は、その時、何を考えていたのだろう・・・。

僕の幸せは、親を泣かせ、兄弟を泣かせ、友達を裏切り、職を失い、そして、莉音に全てのものを、捨てさせてまで、手に入れたかったのか・・・。そこまでして、手に入れたかったのか・・・。冷静になりそこまで、考えた事は、なかった。ただ、莉音の側にいたい。そ、思っただけ・・・。純粹に、最初は、ただ、それだけだったと思う。もうすこし、もうすこし・・・。と、思いながら、手が届きそうになると、また、遠くへ、いつてしまう。手が届きそうで、届かない莉音を追いかけて始まっていた。美央の事も忘れ、この日。僕は、莉音に触れたいと思っていた。

「でさ、どうしようか？レポート出来た？」

嶺が話しかけてきた。研修も、取りあえず、1日終わり、これから地域毎の懇親会が予定されていたが、まだ、時間があつた。莉音は、嶺を警戒して、少し、距離をとっていたが、周りに知っている人がいないと、結局、2人で、話をする事となっていた。堅苦しい研修も終わり、頭も体も疲れていた。

「うーん。いまいち、資料が集まらなくて」

莉音は、頭痛がしていた。ここんところ、公私共々、忙しかったせいか、気の休まる時がなかった。

・・・あんたのせいよ・・・

思いながら、

「疲れてるんだけど、いまいち、資料がなくて」

気のない返事をした。

「資料あれば、まとめられる？僕がやりますか？なんか・・・」

嶺が、莉音をじっと、みつめた。

「顔色良くないですけど・・・」

「うん。ちょっと、疲れてるだけ。あとで、資料届けるから、少し、部屋で休んでくる」

莉音は、心配する嶺を後に、部屋に戻っていった。

しばらくすると、莉音の部屋をノックする者がいた。嶺だった。

「顔色良くなかったし、疲れたのかなと思つて。これ」

嶺が差し出したのは、ピンクの箱に入ったケーキだった。美央も、疲れると甘い物を好んだ。

「あつ……。」

莉音は、嶺の気遣いが嬉しかった。

・・・資料を渡さなきゃ・・・。

莉音は、後ろを振り返り、いつの間にか、部屋に嶺が入ってきている事に、気がついた。

「この間の事。覚えてる？」

嶺が、真剣な声で、後ろから、聞いた。

「えっ？忘れてたんじゃ」

笑いながら、莉音は、振り返ろうとしたが……。また、嶺に、後ろから、抱きしめられてしまった。

今度は、強く、細い莉音の体を抱きしめていた。

「どうして？」

嶺が、苦しそうにいった。

「どうして？1人じゃ、ないんだ・・・」

嶺の唇が、莉音の唇を挟んだ。この間とは、全く、地学、激しく、莉音の唇を求めた。莉音は、今回も拒まなかった。というか、拒めなかった。自分は、初めて、見た時から、嶺に魅かれる予感がしていた。

でも、それは、認めては、いけない思いで、今は、人妻なのだ。一生をともにする穏やかな人が、待っている。今更、この若い男性と恋愛の海へ漕ぎ出す訳には行かないのだ。彼との、恋愛は、莉音を、傷つける。愛しては、いけない。それなのに、莉音は、嶺を受け入

れようとしていた。そのまま、嶺は、莉音を求め続け、戻れない橋を渡ってしまった。

忘れない時。

ずっと、思っていた。嶺を見る時。隣にいる時、嶺の腕や肩を・。
・。そして、自分は、嶺の背中から、腰や嶺の後ろ姿を、いつも追いかけていた。

・。・。こうなりたかったんだと思う・。・。

莉音は、嶺の背中を撫でていた。両肩の間から、背中のくぼみから、すーっと腰まで、優しく、莉音の指が滑っていく。

・。・。嶺が好き・。・。

夫は、優しい。穏やかで、莉音を暖かく、包んでくれる。友達の紹介で知り合い、喧嘩する訳でなく、なんとなく、結婚まで、いつてしまった。穏やかな日々。全身を焦がすような恋等、自分には、無縁だとおもっていた莉音だった。

・。・。でも・。・。

嶺との恋は、莉音を、跡形残らず、焦がす恋になるかもしれない。自分は、恐ろしい恋のイバラ道うい1歩き出してしまった。莉音は、感じ始めていた。嶺を、愛する事は、これから、苦しみを味わう事になるという事を・。・。

不倫。これは、不倫だ！。倫理に非ず。それとも、1時の過ちでおわるのか・。・。

・。・。たぶん。過ちでは、ない・。・。

嶺も莉音も、わかっていた。2人共、引き返せない道を歩き始めてしまった事を・。・。

・。・。引き返せない・。・。

嶺も、ボンヤリ考えていた。こう、なれたらいい。思った事は、あった。莉音と、そうになりたい。考えた事が、あったが、とにかく、莉音は、人妻である。こんな風になれるなんて、思っていなかった。

せめて、キスだけでもしたい。ささやかな嶺の願いだった。でも、莉音を抱く事が、出来たなんて……。はずみに、まかせて、莉音を抱いた。一瞬、拒んだが、嶺は、半ば強制的だった。自分は、後悔していない。

・・・莉音と一緒にいたい・・・

それだけで、満足だ。最初は、誰でも、ささやかな、願いから始まる、それは、1つの目標を達成すると、次へと向かっていく。

最初は、莉音の側にいたかった。その次は、唇をもとめ、そして、今は。

「莉音」

嶺は、莉音の唇を再び求めていた。

夫を受け入れられない。

家の前にいた。

・・・只今、到着しました。・・・

帰宅したよ。メールを嶺にいれた。あれから、懇親会は、嶺だけが出席した。莉音は、ぼーとしながら、ベットの上で横たわっていた。

・・・自分達は、これから、何処へ向かって行くのだろう・・・その時には、感じていなかった。不倫の重圧感が、今のしかかっている。嶺と一緒に時は、夢中で嶺を求め、嶺の事しか考えてなかった。自分は、二重人格者じゃないかと思える程、全てを忘れ、嶺だけのものになっていた。・・・が。今、帰宅し、家の前にたっている。小さなマンションの玄関口。このドアの向こうには、何も、知らない夫が、待っている。莉音は、嶺へのメールを終えると、携帯のメール着信音を消去して、バッグに放り込んだ。

「帰ったよ」

ドアを開けると、いつもの通り、中で待っている夫に声をかけた。

「お帰り」

何も、知らない夫が、優しい笑顔で、莉音を迎えた。

「ご飯、作っていたけど。シチュウでよかった？」

莉音の、カバンを、夫は、いつものとおり運ぼうとしたが、莉音は拒んでしまった。瞬間、嶺からのメールが入った携帯を見られるかも・・・と、思ったのだ。

「あつ・・・。大丈夫だから」

あわてる莉音に、夫は、何も、疑いしなかった。

・・・でもね。・・・

莉音には、不安があつた。

・・・嶺に抱かれてしまって。・・・

自分は、夫を欺く事が、出来るのだろうか？このまま、夫に抱かれ

れば、嶺を裏切る気持ちになっていた。そう思う事自体が、もう、嶺と関係を持ってしまった莉音は、夫より、嶺を思っている事になっ
てしまうのだが・・・。

やはり、夫を受け付けられない。

莉音は、夫を拒んでしまった。気持ちも体も嶺を受け入れたがっ
ていた。

別れのアドバイス。

嶺には、大学からの友人と、定期的に飲みに行く事が、しばしばあった。何人か、こちらから、大学に行つてて、向こうで知り合った友人だ。結構、集まつて、気のあつた同士、悪ふざけをしたり、今の若者らしく、真剣に恋の話等するのだ。結局、集まつて、散々、飲んだ後には、互いの恋人の話になり、最後には、嶺の話になった。大学時代から、美央との事は、皆知っている。

「結局、どうなつてゐるの？」

一番親友の慶介が、聞いてきた。

「誰の事？」

思わず嶺の口からでた。

「誰？つて？美央の他に、誰かいるの？」

その場にいた4人が、顔を見合わせたが、すぐ、にやけた表情になった。

「だから、俺がよく言っていただろう？」

慶介は、それ見たことかと言わんばかりに、嶺の背中を叩いた。

「お前には、いろいろ経験してほしいんだよ」

「いや。それが・・・。」

嶺は、ためらつた。莉音との事を話すか否か。

「言えない事かよ。まさか、不倫とか？」

慶介がひやかした。兎に角、学生時代から、人目をひく嶺は、女難が多く、よく、冷やかして、飲むのが、慶介の恒例となっていたのだ。

「・・・」

困つた顔の嶺。

「あー！。そうか」

慶介は、察し、他の2人は、身を乗り出した。

「話にくいんだけど」

嶺は、ポツリと言った。この何日か、莉音の事で悩んだ事。そもそも、2人の間に、起こった事、自分を抑えられなかった事。そして、莉音への気持ち、このざわめいた居酒屋で語りだした。

慶介は、嶺の理解者である。2人で、よく遠くまで、旅行しては、おふざけ写真を撮っていた。たぶん、嶺が、不倫に手を染めたとしても、彼は、理解しようとしてくれた。・・・が、1人、妻帯者がいた。彼の意見こそが、世間の一般意見だろう。

「嶺お前さ、」

拓斗が、真剣な顔で、嶺に向かった。

「相手の家をグチャグチャにしてまで、一緒に居たい相手な訳？」

そう、拓斗は、美央の事が、昔、好きだった。いまは、家庭を持ち、子供にも、恵まれている。

「親を泣かし、兄弟を泣かし、周りを不幸にしてまで、一緒にいたい相手なのか？」

興奮していた。嶺は、そこまで、考えた事は、無かった。莉音への思いで一杯で、ようやく、手に入れた喜びと、莉音の夫への申し訳ない思いでは、いた。

「仕事だつて、お前・・・どうなるか・・・。ようやく、馴れてきた所だつて、言つてたろう？」

真剣に拓斗は、嶺の事を心配していたが、もしかすると、妻を寝取られた夫の気持ちになつていいるのかもしれない。

「・・・」

嶺は、何も応えられなかった。拓斗のいうとおりだと思った。

「別れる！つて、いうか、もう、逢うな！連絡も。そうメールも辞めろ！」

熱弁だった。

嶺は、黙つて、うなだれていた。

「まあまあ、な！」

慶介が、嶺の肩を叩いた。

「いいから、お前ら、行き着く所まで、いっちゃんえよ！」

嶺の迷いを打ち消すかの様に、慶介は、言った。嶺が、莉音への思
いが深い事を誰よりも、理解しているつもりだった。

もう1つの別れ。

もうすぐ、バレンタインがせまってきた。

2月13日は、嶺の誕生日。できれば、誕生日と一緒に祝いたい莉音だったが、嶺の都合で、2月14日を、一緒に過ごす事になった。

・・・本当は、誕生日は、あの人と一緒なんだろう？・・・

莉音は、言いたかったが、責める権利は、ないので、我慢した。本当は、独占したい。自分の物だと言いたい。それが、言えないのが、不倫なのか・・・お互い信じあう。それだけしか、結びつきを確認する方法はない。

・・・自分だって、言えないでは、ないか・・・

莉音は、自分の立場を考えなくなかった。冷静に考えれば、自分の罪がわかる。心の淵を見ないように、嶺には、無邪気に聞いた。心の闇を見透かされない様に。

「バレンタインは、ケーキでも焼く？」

「え・・・できるの？」

美央は、できない。

「失礼しちゃうわねー」

莉音は、お菓子作りに自身があった。

「材用買って行くから。キッチン借りるね！」

プレゼントは、何にしよう。莉音の頭は、嶺と過ごす1日で一杯になっていた。

「わかった！楽しみにしてる。」

嶺は、笑った。会社のコピー機の側で、会話をすると、2人は、すぐ、離れた。自販機で、コピー機の側で、よく言葉を交わしたが、嶺が女性と一緒に会話をしている姿は、珍しい事では、なかった。で、特別噂には、ならなかった。莉音は、嬉しそうだった。嶺は、じっと、莉音の後ろ姿を見送った。

「別れる」

・・・判つてゐる・・・

嶺は、呟いた。莉音の側に居たいと心から願っている。でも、それは、何も知らない人を不幸に陥れる事。だったら、せめて、この日だけは、普通に過ごしてから、別れを言おう。自分から、不倫に手を染めていて、何て、買ってない草だろう。嶺は、失笑した。莉音が、望んできた訳でない。自分から、莉音に手を伸ばしたのだ。・・・高値の花なのか・・・

嶺は、再び笑った。

「どうしてなの？」

美央は、激怒して、携帯の向こうで、怒鳴った。

「あえない？って、どういう事？」

美央が、イラついていた。

「無理だっただんだと思う」

嶺は、莉音と、別れるつもりでいた。・・・が、その前に美央とも、別れようと思っていた。こんな気持ちでは、いられない。

「毎年、嶺の誕生日は、一緒に過ごす予定だったでしょ？」

「ごめん。一緒に居られなくなった。」

美央に嘘は、つけない。

「好きな人が、できた」

「！」

美央が、絶句した。

「その人と、出来るだけ、一緒にいたいんだ。だから・・・」

「ちょっと」

美央にさえぎられた。

「この間、あったよね？あったばかりなのに・・・。どうして？」

強気的美央が、泣いていた。

「無理だよ。別れられない。」

「ごめん」

「だめだよ」

嶺は、首を振った。

「今から、そちらに、行く」

「だめだ。逢わない。」

「どうしてなの」

「ごめん」

「ずるいよ・・・」

泣きながら、引き止めようとする美央の携帯を嶺は、きった。誰かへの思いを貫こうとする時、人は、何て、残酷になれるんだろう。美央だって、気持ちがあつて、付き合った筈だ、それが、今、別れようとしている。莉音ともいつか、別れなければならぬ。美央との事も上手く、やれば、別れなくても、済むかもしれない。だが、嶺には、上手くできなかった。いつか、別れてしまふかもしれない。莉音に、今の気持ちを全て捧げたい。嶺の今の気持ちだった。

2月13日は、1人で過ごす。それは、美央とでもなく、莉音とでもなく、自分1人の誕生日。

許せない。

嶺には、シルバーのチョコカーが似合うと思う。莉音は、駅で、莉音にシルバーのチョコカーを買った。堂々とお揃いにするのは、恥ずかしいから、こっそり自分にも、同じデザインのチョコカーを買った。2人で出掛ける時くらい一緒に、首にかけたい。プレゼント用に、1つは、リボンをかけてもらって、自分のは、そのまま、首にかけてもらった。材料を買い、嶺の部屋で使えるようカップを2つ買った。たぶん、男の1人暮らしなのだから、ケーキ用の皿もないかもしれない。

・・・雰囲気も大切よね・・・

莉音は、1000円ショップで、食器も買い揃え、嶺のマンションへ向かった。

嶺のマンションは、街の側にある。ショッピングセンターのすぐ側。莉音は、そこに車を停めると、嶺のセキュリティーマンションにむかった。部屋番号は、502号室。呼び出しを押すと、ロックは、解除され、エレベーターの下で、嶺が待っていた。

「やー！」

嶺は、おどけて見せた。

「おはよう」

莉音も照れくさそうに笑った。

「いろいろ買ったきたの。きゅうり嫌いだったんだっけ？」

「そ！小学校の時、はいたんだ」

「えー！」

莉音は、無意識にサラダっていうと、きゅうりを買ってしまっていた。

「ごめん。つい買っちゃった・・・」

「いいよ。よけて食べるから」

嶺は、莉音の荷物を持つと、エレベーターに入り、5階へと向かった。

ていった。

その後、美央から、何回も電話があった。嶺は、出なかった。

・・・終わっただ・・・

嶺は、思っている。自分は、これから、残りの時間を莉音と一緒にいたい。それなのに、美央と一緒にいたら、2人に申し訳ないと思っていた。中途半端に期待を持たせては、いけない。美央に冷たくしないではいけない。電話にも、でない。メールも、受けなかった。何度も、何度も、メールは、届いた。着信拒否する事は、出来る。それでも、万が一のため、それは、しないでいた。

・・・あいたい・・・

美央は、嶺を愛している。それは、ずっと変わらないものだと思っていた。この間だって、嶺は、自分を抱いたでは、ないか。いつもと変わらなかった。それなのに、急に、好きな人が出来たというのか？好きな人がいるのに、自分を嶺は、抱いたのか？

・・・許せないよ・・・

美央の心の中で、悪意が育っていった。いままで、一緒にいた。突然、自分の納得もしないまま、別れるという嶺が許せない。自分を裏切った嶺が許せない。あの時、自分を好きだと言ってくれたではないか。これは、未練では、ない。まだ、自分達は、終わってない。美央は、そう思っている。

2月13日。莉音を迎え入れる前日。

この日、嶺は、1人で過ごしたかった。正確にいうと実家で、家族とゆっくり過ごすつもりだった。昼過ぎまで、寝て、午後から実家に行く予定でいた。・・・が。インターホンが、朝早くから、来客を知らせた。モニターは、見慣れた姿を映し出した。

「美央！」

嶺は、目をこらした。

「嶺！あけて」

インターホン越しに、美央が叫んでいた。

「早く、あけて」

「どうして？」

嶺は、あつせた。こんな朝早くに、周りに迷惑を掛け兼ねない。

「まって」

下に降りていって、階下で話そうか？思ったが、言い争いになりかねない。嶺はセキュリティを解除した。

「どうしたの？こんな、早くに」

嶺は、ドアを開けると冷静さを装った。美央は、中に誰か居るのかと疑っているらしく、乱暴に部屋に入った来た。

「どういう事？」

ヒステリックに怒鳴った。

「どうしたの？」

嶺は、お茶を用意しながら、背中から声を掛けた。

「別れるって、話」

「うん。座って」

嶺は、美央にお茶を渡した。

「気持ちに嘘はつけない。悪いと思ってる。」

「嶺。どうしてなの？この間まで、一緒に居るって、言ってたじゃない」

「美央」

嶺は、美央を抱き寄せた。

「傷つけたくないんだ。これ以上」

「嫌だよ」

美央はすがりついた。

「こままだと、みんな傷つくんだ。俺が悪い。美央。今まで、本当にありがとう。」

「ちがう！」

美央は、嶺を突き飛ばした。

「傷つくのは、嶺。あなた自身でしょう！新しい女の所へ行きたい

「んでしょう」

激しい怒りの顔。

「そうだよ」

嶺は、哀しそうに言った。

「側に行きたいんだ。気持ちが、変ってしまった。美央、心のない俺がそばにいても辛くないの？」

「辛くない！」

美央は、両手で、嶺の手を握り締めた。

「側にいて。お願い。いままで、一緒にいたじゃない？急には、無理なの。時間がほしい。もう少し、そばに、いて」

「美央。無理だよ」

「離れない。そうでないと、あたし、何するか、わからない」

美央は、激しく、嶺を睨んだ。

「美央・・・」

「嶺！キスして！」

美央は、嶺の首に手をまわしていった。

2人のバレンタイン。

結局、嶺は、美央に負けてしまった。美央に誘われるまま、思い道りにされてしまった。

無理矢理、嶺の別れ話を、否定すると、

・・・また、くるから・・・

と、言い残し、美央は、怖いほど、キツイ顔で、嶺のマンションを出て行った。

嶺は、ずーっと横になっていた。考えていた。その間、実家から、何度か、帰宅を問う電話がなっていた。

・・・自分は、どうすれば、周りを傷つけないで、すむのだろうか、このまま、美央と一緒にいて、美央を傷つけないのだろうか？自分の気持ちに嘘をつく事が、出来るのだろうか？莉音と、少しだけでも、一緒にいたい。後で、別れる事になったとしても。いま、ほんの少しだけ、莉音と過ごす時間を許して、もらえないものだろうか？・・・

嶺は、深いため息をついた。

「ねえ！ちゃんと、あわ立ててよ！聞いているの？」

莉音が、イタズラして、生クリームを、嶺の顔につけた。

「聞いているよ！」

嶺は、ふざけてる莉音の、頭をこずいた。

「だって、ばーっとしているからん」

莉音は、嶺に蹴りをいれた。

「普通、するかな！」

「普通じゃ、ないしー！」

こうして、嶺のマンションで、ふざけるのは、何回目だろう？最近、週に、2回は、逢い、一緒に食事をし、時間を過ごす事が、ふえていった。最初は、誰か、人に見られるのを気遣って、マンションや、

隣の街で買い物していたが、次第に、2人で、映画を見にいたり、ドライブに行きたくなってきた。勿論、旅行も。メールで、いろいろ架空の旅行計画をたてたりした。

・・・いつかは、別れなければ、ならない・・・

時間を惜しむ様に、莉音を愛す。嶺は、時間を惜しむように、莉音との時間を大切にした。

・・・でも、もし・・・

嶺は、考えを打ち消した。

・・・いや。そんな・・・

出来る事なら、莉音とずっと、一緒にいたい。嶺は、思っていた。・・・もし。叶うなら・・・

嶺は、嶺の為に、料理する莉音の後ろ姿を、黙って、みつめていた。「ねえ。莉音。」

嶺は、莉音をそつと、後ろから抱きしめた。

「どうしたの？急に・・・。」

莉音は、嬉しそうに振り返った。

「旅行行きたい」

「旅行？また、なんちゃって、旅行の話？」

「違う・・・。本当の旅行。」

「行きたいね。」

「そっじゃなくて」

嶺は、向きなおった。

「行こう。うん。時間は、作らないとだよ」

「えーっ！まだ、ティラミス出来てないんですけどー！」

嶺は、無理矢理、莉音の手をひくとパソコンの前に座った。

「どこいききたい？」

「本気？」

「本気」

嶺は、莉音を前に座らせた。

「予約を入れて。後は、休暇願いを出すだけ。俺は、当日、腹痛か

な？」

2人で、笑った。嶺の胸には、莉音からのチョコカーが、光っていた。

秋花火の計画。

結局、嶺は、あれ程、友達に言われていた。別れ話は、出来なかった。

・・・出来る訳がない。・・・

逢う時間を惜しむ様に、過ごしているのに、別れの話なんて、そう簡単に出来る訳もなく、まして、自分にその気がないのに。

・・・もう少しだけ・・・

嶺は、思った。

2人が、過ごした2月14日から、職場であう嶺と莉音は、なるべく、自然を装っていたが、なんとなく不自然な感じが周りは、感じとっていた。鈍い人達は、気付かなかったが、特に女性は、なんとはなく、莉音が、嶺を意識しているのを感じとっていた。

「もう、英さん！人妻なんですからね。」

意地悪なお局達は、からかい、ランチのネタにしていた。

「まずいよな・・・。」

嶺は、気にしていた。

「俺は、ともかく、莉音は、気をつけないと」

「そう？」

「だって、旅行。行きたいだろう？」

嶺からの、メールだった。もう、少し、暖かくなったら、温泉に行こう。嶺からの、提案だった。温泉は、北関東に行く。莉音の好きな美術館巡りをし、ショッピングモール巡りをして、ラーメンを食べる。

旅行好きの嶺が、ネットでいろいろ調べて、計画をたてていた。

「いい所、あったんだ」

嶺が、はしゃいでいた。

「白い温泉なんだ。とろっとしてるんだって」

「温泉に泊まるんだよね？」

「そうだよ。」

なんとなく、莉音は、照れ笑いした。

「部屋は、2つ？」

「2つとっても、最終的には、1つになっちゃうから、1つにしておく。」

「布団は、放してね？」

「1つにする？」

嶺は、うれしそうだった。2日間、この街を離れ、ずっと、一緒にいる事が出来る。時間を気にして、あわてて、莉音が帰って行く後ろ姿を見送る時、嶺は、切なかった。夫の待つ家に帰る現実の莉音がそこにいた。

「莉音の夫が羨ましいよ……。」

遅くなった莉音を、車でおくる時、嶺の口から、思わずでた言葉。

莉音は、何て、言ったらいいか、解らなかった。何の弁明も出来ない。このまま、嶺についていきたい。

……嶺が、一言言ってくれたら……

莉音は、考え始めていた。

……もし。嶺が、言ってくれたら……

覚悟は、出来てる。思い切って、嶺の元へ、行く。

「なんか、嬉しそうね？」

「そりゃあね。」

いろんな所へ行こう！嶺は、提案していた。温泉に行く。そして、花見。嶺のフットサルの試合を応援して、コンサートも行く。東京にシヨッピングに行つて、海にも行く。そう、花火。花火大会。嶺は、花火大会が好きだった。

「花火？」

莉音が言った。

「花火って、夏だけじゃないのよ？知ってる？」

「そうなんだ？」

「9月にも、花火があるの。寒いけどね。秋花火って、言うんだって」

「秋花火？」

「そう、あまり、聞かないでしょう？」

「見に行きたいな。」

「でしょう？見に行きましょう」

「だね。」

嶺は、ふっと、寂しい目をした。秋には、2人は、どうしているんだろう。できれば、2人で、居たい。

「花火行つて。そして、コンサート行つて。また、温泉行つて」

「京都もね」

「京都？京都じゅあ、1泊は、きびしいな。」

「じゃ、軽井沢。」

「軽井沢は、5月に行こう」

ずーと、2人でいれる。莉音は、そう思っていた。そして、北関東への旅行の計画に思いをめぐらせた。2日間一緒にいれる。それだけで、幸せだった。

携帯は鳴る。

当日、嶺と莉音は、駅のターミナルで待ち合わせをした。案の定、朝に弱い嶺は、少し、遅れて現れた。車の助手席を開け、莉音は、滑り込むと、頭から、コートを被り、顔を隠した。

「いつまで、そうしてるの？」

サングラスの嶺が、笑いかけた。

「高速乗るまで……。」

「どうして？」

「見られたら、困るから……。」

「へえ……。見られたら、困るんだ！」

「いじわる。覚えといて」

「俺、頭悪いから、覚えてられないかも」

コートの隙間から、莉音は、キツとにらんだ。

「まあ、まあ、怒らない。怒らない」

嶺は、莉音に何かを放り投げた。

「なあに？」

莉音の好きなチョコだった。それもビター。

「わかってるじゃん。」

「だろう」

「それじゃあ。はい」

莉音が、差し出したのは、小さいお弁当箱。

「食べて、ないでしょう？」

「やった！俺、今朝は、ヨーグルトだけなんだ」

莉音は、小さなお弁当に、おかずとおにぎりを用意していた。いつも、莉音は、晩御飯のお裾分けを嶺に用意し、こっそり会社のロッカーにいれといた。室温の高い日等は、保冷剤を入れて、ロッカーに用意していた。

2人は、北関東を目指した。初日は、莉音の好きな美術館をめぐる。着いたら、生憎の雨だった。早咲きの桜が、雨に濡れている。

「だーれかさんの行いが悪いから。」

嶺は、おどけた。

静かな美術館を巡りあるつてると、突然、お腹がなった。

「ごめん」

莉音のお腹の虫だった。

嶺は、笑った。いつも、すましている莉音には、意外な行動だったから。

「らーめんでも食べるか？」

「うん」

嶺は、車に戻ると、2人でらーめんを食べにむかった。事前に嶺が調べておいたらーめん屋へ。

その後、名物のじゃが揚げを食べ、ショッピングセンターで、莉音の買い物に付き合い、山間に温泉宿に向かった。濁り湯の、こじんまりとした上品な旅館だった。

「ここに泊まるの？」

「そうだよ」

嶺が、フロントで受付をすませた。小さな旅館。2階の奥の部屋に着くと、嶺は、ガイドを莉音に放り投げて来た。

「俺、温泉に行ってくるから。明日、どこまわるか、調べておいて」
持ってきた荷物を広げると、嶺は、タオルを片手に温泉に向かっていった。

「はいはい。そうしますよ。」

莉音が、嶺の出て行った後、ガイドを広げようとすると、携帯がなっていた。

「？」

みると、嶺の携帯である。開こうか……。莉音は、迷った。どうしようか……。迷いながら、莉音は、嶺の携帯を手にとっていた。
……が、開かなかった。ロックされていたのだ。

「なんだろう」

ロックしておかなければ、ならないなんて……。すっかりしないまま、時間だけが過ぎていき、しばらくすると、嶺が戻ってきた。

「あー。気持ちよかった。莉音も行ってくれば？」

「うん。」

莉音は、嶺の携帯をとった。

「携帯鳴っていたみたいけど」

「そう？」

嶺は、莉音から、携帯を受け取ると、画面をみた。

「大丈夫なの？」

嶺の表情が、硬かったのを見逃さず、莉音は、言ったが。

「うん」

と、言っただけで、嶺は、携帯を閉じた。

「じゃあ、あたし。行ってくるね。」

自分が、温泉につかっている間に電話するのもかも。そう思いながら、

莉音は、部屋を出た。女の勘だった。

・・・なんか、嫌な予感がする。・・・

莉音は、何かを感じていた。

部屋に戻ってくると、いつもの嶺になっていた。

「どうだった？」

「露天風呂もあったね？」

「恋愛成就の露天風呂だった」

「お帰り」

嶺は、莉音を抱き寄せた。

「いい匂い。」

「シャンプーかな。」

莉音が、顔を上げようとすると、また、携帯がなった。

「いいよ。出てよ」

「ううん。こっちが大事」

「気になるから、出て!」

促されて、嶺は、しぶしぶ携帯にでた。

「はい。どうしたの。」

嶺は、ちらつと、莉音の様子をみると

「ごめん」

と、いつて、部屋から、出て行ってしまった。

・・・気になる・・・

この、古い温泉宿は、音が、よく響きわたる。莉音は、テレビの音をひくくして、思わず、聞き耳をたててしまった。嶺の声が聞こえてくる。

「今・・・。ちょっと。そう。ごめん。」

要所は、うまく聞こえない。そのうち、嶺は、部屋に戻ってきた。

「うん。大学の友達」

聞いていないのに、嶺は、言い訳をした。

「聞いてないけど」

莉音は、不機嫌に応えた。

しばらく、沈黙が続き、食事の時間になった。なんとなく、気まずい雰囲気のまま、移動して、2人は、食事をし、再び、部屋に戻る頃には、莉音は、気を取り戻していた。

「親父からのなんだ」

嶺が、とりだしたのは、高級そうなワイン。今日は、時間を気にしないで、飲もうとばかり、嶺は、莉音のグラスにワインをついだ。

「だめだよ。飲みすぎちゃうよ」

「まあ。」

嶺は、莉音にグラスを渡した。そして、時間は、すぎ、嶺は、莉音を腕に抱き眠りについていた。一度、眠ると、なかなか、起きない。気持ちよさそうに、深い寝息をたて、横に眠る嶺をみていた。おもいだしたように、頭を掻き、口をならす。面白いクセがあるものだ。トイレに立とうとして、ふと、嶺の携帯が、目にはいった。

「誰からだっただんたろう・・・。」

なんとなく、莉音は、わかっていた。

渡さない！美央の計画。

判っていた。別れの日が近い事を……。大学時代から、長いのである。嶺が、今、何を感じ行動しようかとしているかは、美央には、十分わかっていた。

嶺との出会いは、大学の説明会だった。たまたま鳴った携帯を取り出そうとした時、美央は、誤って、水没させてしまった。親とも連絡もとれず、困っていたのを、声をかけ、助けてくれたのが、七藤嶺だった。美央の好みの男性だった。なかなか、声もかけれずいたのを、周りの友人達の、後押しで付き合うようになったのだ。子供みたいに、無邪気な嶺は、一緒にいて、飽きる事は、なかった。いつも、情熱的に、美央に語りかける。

・・・間違はなく、自分は、愛されている。・・・

美央は、そう感じていた。だから、大学を卒業し、別の地方に行くという聞いた時も、何の不安もなかった。自分達は、繋がっている。そう信じていたのだが、最近の嶺は、メールの返信すら、遅く、なかなか、逢おうとは、してくれなかった。

・・・私達、だめかもしれない・・・

職場の、飲み会で、先輩達に、泣き崩れたことも、あった。でも、このまま、嶺と、別れたくない。美央は、もう、自分には、嶺しかないと思っていた。自分は、嶺に愛されている。きっと、誰かに、誘惑されたに、違いない。美央は、思い嶺を取り戻すべく、嶺のマンションをたずねたのが、2月13日だった。

・・・嶺に、愛されたい・・・

こうなった時、女は、強いもので、優柔不断で、友人達から、莉音との関係を否定されていた嶺は、美央との、関係を持ってしまった。・・・離れないで・・・

美央は、そういい残して、帰っていった。自分から、こんな事を言いに来た訳では、ない。嶺に否定してもらいたかったのに、嶺は、

自分とずっと一緒にいたいとは、言ってくれなかった。帰りの終電で、美央は、涙が、とまらなかった。こんな事は、自分からしたくなかった。だけど、嶺を失うのは、もっと、嫌だ。嶺と過ごした時間が、切なかった。自分と、一緒にいると、何度も、メールしてくれた夜が、なつかしかった。もう、嶺は、自分をあいしては、いない。自分に思いがないのに、傍にいないのは、辛いと心が叫んでいた。それでも、嶺に、心が、なくなったのなら、それでもいい。傍にしよう。美央は、終電の中で、周りの目もはばからず、声をあげて、泣き出していた。

それから、1ヶ月半は、過ぎただろうか。美央は、その間、嶺に連絡をしていなかった。そして、ある時期が着てから、嶺に電話した。「嶺？」

最初は、嶺は、出なかった。何回か、かけても、でない。でなければ、出ないほど、苛ついて来る。諦めかけた時、ようやく、嶺がでた。

「どうしたの？」

落ち着いたいつもの、嶺の優しい声だった。

「話があるの」

「まって。」

嶺は、周りを気にしているようだった。傍に誰かが、居るのか。ドアのしめる音がして、嶺が、はなしかけてきた。

「何か、あったの？」

「あったわ。大事な話なの」

「いま？話したいこと？」

嶺は、誰かに、気をつかっているようだった。

「ゆっくり、話したいの。時間をつくって。」

「わかった。今は、俺も、無理だから」

「誰か、いるの？」

「うん。温泉に来ている。」

嶺は、それだけをいった。美央が、察して、自分を諦めてくれるかと、思ったが、予想以下に美央は、冷静だった。

「じゃ。戻ったら、連絡して」

「わかった」

意外と、冷静な、美央の態度に、驚いたが、部屋の中の、莉音が、気にかかったので、すぐ、携帯を霧、部屋に戻っていった。案の定、莉音は、不機嫌になっていた。

1枚の写真。

「どうしたの？電話じゃだめだった？」

莉音と旅行から、帰った嶺は、すぐ、美央にメールした。なるべくメールの方が、都合が良かった。第一、感情を抑える事が出来る。

美央の話は、だいたい検討がついたので、電話で揉めるのは、どうしても避けたかった。・・・が、美央は、どうしても、嶺と直接、逢いたがった。わざわざこちらまで、出てくるのは、大変だからと、嶺が言っても、美央は、きかなかった。嶺のマンションまで、美央は、やってきた。

「嶺。私の話聞いてくれる？」

美央は、バッグを開けると、中から、1枚の写真を取り出した。

「見てほしいんだけど」

粗い映像写真だった。何かをエコーで撮ったような・・・。

「これは？」

嶺は、美央の顔を見た。美央が、ひきつった顔で嶺の顔を見ていたのだ。

「胎児の写真よ」

「・・・」

嶺は、驚いて、美央の顔を見た。

「私の。」

無表情の恐ろしい顔だった。

「正確には、あなたと私の」

「ちよつと、まって」

嶺は、パニックになった。

「冗談だよな？だって、美央。あの時は・・・」

震えながら、美央の肩を掴んだ。

「そう。大丈夫だって、言っただわ。でも、そんなの、嘘。どうしても、あなたの子が、欲しかったの」

「な……。待ってくれよ」

嶺は、首を振った。

「やっぱり、嬉しくは、ないのね。喜んでくれると思ったんだけど」
美央は、表情ひとつ変えない。

「いいわ。私、一人でも育てるから」

嶺の手から、写真を奪い取ると、バッグに、投げ込んだ。

「美央。俺は、君をもう、愛していない。」

嶺は、哀しそうに呟いた。

「俺の気持ちがないのに、一緒にいて、幸せになれるのか？」

「なれるわ！」

美央は、嶺を押し倒した。

「私は、あなたを愛している。傍にいたい。嶺が、傍に居てくれるだけで、幸せなの。どうしても、どんな手を使っても、嶺の傍にいたい。」

嶺の胸に、すがりついた。美央は、結婚している訳でもないのに、病院に通い、子供の出来やすい環境を整えていた。なんとしても、嶺の子供を授かりたい。計画的に、嶺を誘った。

「俺が……。悪い」

確かに、誘いに乗った。嶺が悪い。でも、それは、恋人同士だった時には、ごく、普通にあつた事。

「嶺。私、産むから……。」

「でも。そんな事、君の両親だって、許さないだろう？」

「おろせなくなるまで、黙ってる。あとは、親も諦めるわ」

「美央」

嶺の唇を、美央は、ふさいだ。

「だめだよ。美央」

「いいの。返事は、しなくても。私は、あなたの子供ができた。それだけを、言いたかったただだから」

美央は、立ち上がると、ドアに向かっていった。

「そおいえば……。」

美央は、振り向いた。

「嶺。あたし。待つてるから」

哀しい眼を見ると、美央は、ドアから、出て行った。動けない嶺を残して・・・。

「別れよう。莉音」

「もうすぐ、お花見の時期よね。」

旅行の帰り道、莉音は、助手席で呟いた。

「だよなー。花粉アレルギーの時期だから、俺には、辛くもあるけどね。」

運転しながら、嶺は、話した。

「春になるんだね。買い物行きたいな？」

「また、買い物ですか？今日、行ったじゃん」

「だって。」

莉音は、甘えた。

「欲しい春用のリップがあるの。気に入ったお店でないと売ってないんだー」

「今回で、有給。使ったしなー！」

「お願い。一緒に行きたいんだ。」

「どうすっかな？」

「えー」

「はいはい。時間は、作るもんだからね。何とか、しましょう」

「一緒にいたいんだもん」

「俺も……。」

ほんの、2、3日前に、嶺と莉音の交わした会話だった。帰宅してから、いつもの、お帰りコールで、嶺から、メールが届いた。

「……一緒にいるだけで、満足……」

「……あたしも……」

莉音が、送ったのも、同じ内容だった。それから、だった。ほんの、2日、旅行の余韻も抜けない内に、嶺から、メールが届いた。いつもの様に、莉音が、予定を尋ねるメールを送った時であった。

「……明日あたり、買い物に行きたい……」

「……明日は、仕事だから、行けない……」

・・・一緒に行きたいから、待ってる・・・

莉音は、嶺と一緒にに行けると思っていた。

「ごめん」

携帯が、鳴った。嶺だった。

「待ってるから。買い物は、嶺に、見てほしいの。」

「莉音・・・。」

辛そうな、搾り出すような嶺の声。

「一緒に行けない」

「待ってるよ。あたし」

莉音は、単純に都合が合わなくて、行けただけだと思っていた。

「莉音。もう、一緒にいれないんだ。」

「どうして？」

「それは・・・。」

莉音の携帯を持つ手が、震えた。

「好きな人が出来た。その人と一緒にいたいから・・・。莉音。ごめん。終わりにしよう。」

か細く消え入るような声。

「嶺。」

莉音は、言葉をなくした。

「あたしは、一緒にいたい。出来るだけ、一緒にいたい。」

切実に、嶺を愛していた。だが、これから先、何も約束できる事は出来ない。形がない分お互いの強い心がなければ、結びついているのは、不可能な恋。

「莉音。だって。俺達・・・。永遠じゃないよね？」

そう言いながら、自分は、判っていて、莉音を愛したのだと、嶺は、思っていた。でも、今、ここで、莉音の気持ちを知りたい。

「嶺。あたしは、嶺と生きたい。」

嶺を離したくない。約束できない将来であろうと、今、嶺を失ったら、生きては、いけないと思うほど、嶺の存在は、誰よりも、大きかった。

「無理だったんだよ。莉音。俺達は。」

嶺が、携帯をきろうとしていた。

「待って！」

莉音の、声は、嶺に届かなかった。もう、一度携帯をかける。発信音が、5回鳴ると、意図的に切られてしまった。

・・・嶺・・・

もう、立って、いらなかった。夕方、食事の準備をしていた莉音だったが、その場に座り込んでしまった。

・・・どうして？・・・

ほんの、2日前は、一緒にいたいと言っていたでは、ないか・・・
・・・どうして？・・・

莉音の、思考回路は、同じ所を回っていた。

携帯が鳴り、嶺からの、メールを知らせた。

・・・莉音。いままで、ありがとう。おれは、莉音の事。ずっと、忘れない・・・

いつかは、別れなければ、いけないと思っていた。が、逢うたびに愛し合う度に、もうすこし、もうすこしと、別れを延ばし続けていた。もしかしたら、自分が、勇気をだしたら、嶺と一緒に生きていけるかもしれない。と、莉音は、考え始めていた。その一番、幸せな時に、嶺から、別れを突きつけられた。

・・・好きな人が出来た・・・

本当だろうか？

・・・その人と一緒にいたい・・・

本当だろうか？

人の気持ちは、そんな急に変わるものなのだろうか？

莉音は、混乱していた。長い夜が、始まるうとしていた・・・。

「これでいいんだ。」

嶺は、莉音からの携帯の着信を拒否した。自分達の恋愛は、祝福されない。判っている。が、こんな莉音を傷つける方法でしか、別れ

られない自分が、許せなかった。でも、ここまで、しなければ、また。莉音の所に、自分は、行ってしまう。かといって、本当の事は、更に、莉音を傷つけ、追い込むであろう。本当の事。いつかは、知れてしまうだろう。でも、今は、言えない。莉音が、早く、自分を忘れ、優しい夫の元へ戻る事を望んでやまなかった。

偽りの気持ち。

悲しみは、突然、現れる。嶺からの別れは、莉音の生きる力をたつたも同然だった。何も、出来なくなっていた。遅く帰宅した夫には、風邪をひいたと答えそのまま、ベッドに入った。体の力が、抜けていた。とにかく、哀しい。つい、最近まで、一緒にいられるだけで幸せと、運転席で答えていたではないか。情熱的に、莉音に口づけていたでは、ないか。考えが、まとまらない。ほんの、何日か、離れていただけなのに、そんなに、簡単に気持ちは、変わるものなのか。そんなものなのか。嶺の気持ちは、自分に対する気持ちは、そんなものだったのか。答えは、でない。何かが、違うと叫んでいた。確かに、莉音を嶺は、愛していた。それは、間違いなかったと、思う。嶺に、何かが、起きた？としても、莉音と離れようとする気持ちに変わりはないのでは、ないか。眼を閉じてても、全く、眠れは、しない。夜の時間だけが、流れていく。どうして、嶺は、自分と入れないのか。その切ない思いだけが、時間と共に、流れていく。

・・・嶺・・・

莉音の目尻を、涙が流れていた。将来のある嶺には、いつか、未来を築く相手が現れる。女に相手にされない男でない限り。いつかは、別れる日が、くるかもしれない。それが、こんなに、急なんて。

・・・眠れない・・・

眠れる筈が、ない。立ち上がる気力さえ失った、莉音の周りだけ、時間は、流れていった。

・・・莉音が、恋しい・・・

できれば、一緒にいたい気持ちに変わりは、なかった。いつかは、別れるかも？しれない？いいや、もしかしたら、自分に勇気があったら、莉音と一緒に生きる事は、出来たはず。もうすこし、時間が、

欲しかった。今、自分は、何をしなければいけないのか？

・・・莉音に逢いたい・・・

切ない。美央と逢わなければ・・・。たった一度あっただけで、自分は、結論を出さなければ、ならない。莉音と過ごした時間は、余りにも、短すぎた。美央に、今までの、責任を取らなければならぬのか？

「美央？」

嶺は、美央に携帯をかけた。

「待ってたわ」

美央は、すぐでた。

「考えた。」

低く、抑揚のない声。嶺の押し出す声。

「子供は、産んでいい。認知は、する。・・・でも」

「でも？」

「結婚は、出来ない。」

嶺の声は、はつきりしていた。その声は、美央に君は、もう愛してないと、いうように、聞こえた。

「子供は、両親が、揃わない環境で、育つのね。」

「美央。できれば。俺としては・・・。」

言いかけたが。

「出来ない。おろせというんでしょう？」

興奮して、美央の声は、震えていた。

「できないわ。無理よ。あなたの子なのよ」

「判っている。」

「あなたの子だから、産みたいの。嶺。わかって。あなたと一緒にいたい。」

「美央。できない」

「お願い。嶺。私には、あなたが、必要なの。一緒に、この子を育てて生きたいの。嶺」

嶺は、沈黙した。何で、答えたらいいのか、わからない。自分の莉

音だかへの、愛情を貫けばいいのか。それとも、これから、生まれてくる子供の事を考える事が、大切なのか……。一番、判っているのは、莉音とは、もう一緒にいられない事。美央と、深くかわって、行かなければいけない事。

「美央。すまない。少し、時間が、ほしい」

莉音とは、もう、終わった。もう、逢う事は、ないだろう。だが、すぐ、美央と、何かしら、進歩があったら、莉音は、どんなに、傷つくだろう。まして、子供が、出来たなんて、彼女が知ったら。自分の、莉音への思いに嘘はない。・・・この、気持ち。彼女に届ける事は、出来ない。

「もう少しだけ、待つ。嶺。一緒に暮らすの、待ってる。」

携帯は、切れた。嶺は、携帯を持ったまま、遠く、莉音への思いを
はせていた。

結婚するから。

今まで、愛していた人と突然別れる時、人は、普通に生活できるのに、何日かかるのだろうか。莉音の気持ちには、虚ろだった。何をしていても、意識がなかった。もはや、生きている状態では、ない。魂が抜けていた。嶺と過ごした時間が、本当に一緒にいた時間だったのか、わからなくなっていた。心が、嶺を忘れると言っているのか、記憶が、磨り減っていった。ただ、ひたすら、嶺が恋しい。あの、体から、たちのぼる香りも、髪の匂いも、唇の感触も忘れてなかった。莉音の心も、すべて、嶺をもとめ、さまよっていた。そして、嶺も、同じ気持ちだった。莉音に逢いたい。いますぐ、この階段を駆け下り、莉音に駆け寄り、後ろから、抱き寄せたい。でも、それは、違う。冷静になり、自分は、どうしたらいいのか。このまま、莉音と、一緒になる事は、難しいと思い始めていた。もう少し、早ければ、それは、可能だったかもしれない。でも、今となっては、このまま、莉音のもとへ、行くのは、無理だった。・・・やっぱり、無理だったんだ・・・

これは、言い訳か・・・。嶺は、決めた。莉音を愛してる。必ず、一緒にいれなくても、幸せを願う方法は、いくらでもあるじゃないか。

「美央？」

嶺は、電話していた。

「決めたよ。」

「待ってた。」

美央は、携帯にすぐ出た。

「結婚しようか」

嶺は、いった。

「電話で、プロポーズなの？ずるいわ」

美央は、笑った。

「でも、嬉しい。逢ったら、改めて、してくれる？」

「いいよ」

力なく嶺は、笑った。

「週末にも、そちらへ、行く。その時で、いいかな」

携帯をきると、すぐ、メールの着信を知らせるサインをしめしていた。たぶん、莉音からだ。嶺は、軽く内容を見ると、削除した。

・・・もう、逢えない・・・

莉音と連絡をとるのは、やめよう。思いなおし、嶺は、携帯を開いた。

・・・俺、結婚する。もう、連絡をとるのは、やめよう・・・

短い内容だった。莉音の、どうしても、逢いたいという、メールに對しての、返事だった。

本当は、逢いに行きたいのに。切なく、辛い日が、始まっていく。

嶺に、メールを送ったのは、就寝前の切ない時間だった。どうしても、嶺に逢いたい。思い切って、嶺にメールしてみた。もしかしたら、嶺の気持ちが変わっているかもしれない。そう、期待して・・・だが、嶺から、還ってきたメールの内容は、莉音を打ちのめし、震わせるものだった。

携帯をみる莉音の、顔が青ざめていた。携帯を持つ手は、震え、立っていられなくなっていた。

「嘘」

思わず、座り込んだ。信じられない。つい、この間まで、一緒にいるって、言っていたじゃないか。

「結婚するなんて」

莉音の両目から、涙があふれた。

事故は、急に。

一番、辛い事。それは、何だろう……。心の中が、からっぽで考えられない。人によって、それは、違うと思うけど、皆、同じなのは、愛する人と一緒に生きられない事じゃないだろうか……。お互い、好きでも一緒に生きられない。そんな人は、この世の中にたくさんいると思う。そして、この悲劇は、永遠にある。嶺にとっても、同じである。でも、もう、忘れよう。心の奥底にある莉音への思い。押し込めて。忘れてしまえ……。自分の記憶の彼方へ、押しやれば、楽になれる。きっと、そうに、違いない。自分は、これから、この人を愛する。ずっと、昔から、知っている人。学食で、いつまでも、ふざけあい、夜は、ゼミのみんなで。朝まで語り明かしたでは、ないか。そう、隣のこの人。

「似合う？」

試着室から、出てきたのは、白いドレスに身を包んだ美央だった。美央たつての、願いで、学生時代に旅行に来てた軽井沢で、挙式を挙げる事になっていた。

「うん。美央は、スタイルがいいから、何を着ても、似合うよ」

嶺は、微笑んだ。心のない笑みだった。

「少し、可愛らしすぎるかな？」

きつと、こういうドレスは、莉音が、似合うだろう。太陽のように、笑う人。彼女との、出会いは、嶺の生活に明かりをともしてくれた。

「何の関心も、ないのかな？」

美央は、見抜いた。

「どこか、別の事、かんがえてるんでしょ？」

「そんな事ないよ。」

帰り道、美央は、不機嫌だった。不機嫌になっても、仕方のない事だったが、嶺も特別、美央の機嫌を伺う事は、しなかった。ただ、

結婚式を挙げればいい。嶺の責任の取り方だった。きっと、莉音に出逢わなければ、美央と普通に結婚していただろう……。自分の中の記憶から、莉音の全てを消してしまえば、楽になれる。あれから、莉音に関する全ての物は、処分した。莉音と一緒に買ったティーカップまで。彼女から、もらったあの、チョコレートまで。嶺は、処分した。自分の中から、莉音の全てを消す。それは、メールさえも。胸が痛んだ。何度も、繰り返し、読み。そこに、莉音の存在を感じていた。でも、それは、もう、繰り返しでは、いけない。ワスレルンダ。

「ねえ。携帯。鳴ってるけど。」

助手席から、美央が、話しかけた。会社からだった。

「ああ……。」

車を、道路の端に止め、嶺は、携帯にでた。

「はい。」

仕事の事かと、嶺は、思った。

「えっ！」

嶺は、言葉を失った。血の気をひいた嶺の顔色を心配した美央が、嶺の肩を叩いた。

「嶺！どうしたの？顔色悪いけど？」

「いや……。ああ……。どうして」

嶺は、ハンドルを掴んだまま、顔を伏せた。

「嘘だ。」

「何があつたの？」

「そんな……。」

嶺は、動けなかった。車は、ハザードを出したまま、いつまでも、停車していた。

その日。

莉音は、少し、元気を取り戻していた。天気の良いかもしれない。朝から、気持ちよく、晴れていた。会社に出てくると、つい、嶺が、

出社しているか、チェックしてしまう。

・・・休みか・・・

嶺の姿は、なかった。今日は、どうしても、サンプルを業者に届けなければ、ならなかった。いつもは、嶺が、自ら、届けてくれたのだが、休みとなると、莉音が、行かなければならなかった。運転は、あまり、得意では、ない。

「間に合わないか。」

仕方がない。これも、仕事のうちだ。

莉音は、事務所に戻ると、車のキーを借り、エンジンをかけた。そう、莉音は、自ら、運転し、納期に間に合わせる為、サンプルを乗せ、山道へむかった。よく晴れた、気持ちのいい、午前中であった。この所、嶺との事が原因で、すっかり痩せてしまった。食欲もあまり、でない。食事をしたいとは、思えなかった。夜もあまり眠れない。気がつくのと、以前、嶺からきたメールを遡り、読んでいる。

・・・もう、けさなきや・・・

毎日、嶺のメルアドを消そうと思っていた。でも、出来なかった。いつか、嶺から、メールが、くるかもしれない。信じてる。嶺が、別れると言ったのは、きつと、何か理由があつたのに、違いない。そう、何か、理由があるはず。

・・・と。携帯がなった。いや、なったような気がした。

「嶺？」

嶺かもしれない。ふと、バッグの携帯に眼をおとした時だった。目の前に、大型トラックが、迫っていた。

「嶺！！」

瞬間、きつと、嶺と叫んでいたのだろう。心から。その声は、嶺に届かなかった。

「莉音が・・・。」

搾り出す声。嶺は、運転する気力を失っていた。美央は、見かねて、

嶺と替わっていた。

「事故なの？」

美央は、疑い深く聞いた。答える様子は、みられない。この嶺の動揺ぶりは、ただの、同僚の事故では、ないようだった。もっと、別の。

「とりあえず、戻らないと」

嶺は、あせっていた。

「大丈夫なの？私が、運転するわよ」

こんな状態の嶺は、見たことがない。美央まで、少し、動揺していた。

・・・きつと・・・

美央は、思った。

・・・この事故は、嶺の・・・

そう。自分より、嶺が選んだ人の事故。美央は、真っ直ぐ正面を見据えた。

「嶺。しっかりして。」

この人を、送り届けよう。美央は、とにかく急ぐ事にした。

逝くな莉音。

そこは、冷たい空間だった。ただ、無限に白く、長い廊下。突き当たりに、紅く光る表示灯が見えた。長椅子に、線の細い優しい男性が、うなだれ座っていた。そこまで、どうやって、たどり着いたか、判らない。美央が、途中まで、運転してくれた。そう、駅まで彼女も、遠距離を運転するのは、無理と考え、新幹線を乗り継いで向かうことを、提案した。車を預け、美央と嶺は、取り急ぎ、莉音の運ばれた救急病院へとたどり着いていた。

・・・一目、見てみたい・・・

美央の気持ちだった。こんなに、嶺を失望させ、苦しませるのは、ただの同僚でない事を察しさせていた。自分から、嶺の心を奪い、今も、占領し続ける女の顔を見たいと思っていた。だが、その人は、今、生死の境をさまよっていた。

「嶺？」

血の気を失いたちすくむ、嶺の前に、力を落とし、長椅子に腰掛けていた男性が立ち上がった。先に、着いていた会社の上司と職場の何人かが、挨拶を繰り返し、一人が、嶺に近づいてきた。

「七藤。英さんのご主人だ。」

嶺の目が、見開いた。ようやく、目の前にいる莉音の夫の存在に気づいたようだった。

「ああ。始めまして・・・。」

嶺は、ぎこちなかった。いろいろな次々と起こる事に対処出来ないでいた。目の前にいるのが、恋焦がれていた莉音の夫なのか・・・。こんな形で、巡り合う事になるなんて。でも、一番の、問題は、いまだ、手術の終わらない莉音の様子だった。

「トラックが、センターラインを超えてきたらしく・・・。レスキューくるまで、ずーと、ハンドルの間に挟まれてたみたいで。」
莉音の夫が、か細い声でいった。

「かなり、がんばっていたんですが。」

後は、涙になって、聞き取れなかった。

「英は。」

その後を、莉音の上司が続けた。

「頭を、打ったらしく。今、頭の中の血腫を取り除く手術に入ってる。かなり、厳しい。胸も打ってる」

「万が一、命が助かったとしても・・・。」

夫が続けた。

「心臓に、問題があるらしく。子供は、もう、望めないと」

・・・ああ。神様・・・

人は、こおいう時、神と呼ぶのだろうか。嶺は、後悔していた。何故、自分は、一緒にいてやれなかったんだろう。別れを選んでしまったんだろう。繋いだ手は、二度と繋がらない。莉音の手を離れた時に、彼女は、さらわれてしまった。もしかしたら、二度と、逢えないかもしれない。もう、二度と、莉音の、あの瞳をみる事は、ない。あの声を聞く事もない。そして、あの体温を感じる事もない。莉音の魂は、今、離れようとしている。

・・・莉音逝かないで、ほしい・・・

嶺は、人目もはばからず、嗚咽を漏らした。耐え難く、涙がにじんでくる。悟られては、まずい。あわてて、その場をさるうと、背を向けると、美央が、後ろから、声をかけた。

「嶺。その人なんでしょう？あなたの好きになった人」

嶺は、美央にふりかえった。口を手で、覆っていたが、その目が、物語っていた。

「嶺」

美央も悲しかった。嶺の目が、絶望の悲しみを浮かべていたのだ。瞳には、涙をうかべ、美央に全てを告白していた。

・・・この人は、彼女を愛してる。そう、誰よりも・・・

美央も悲しかった。自分より、彼女を深く愛している事を、目のあたりにしたから。今、彼は、自分より、中にいる彼女の命を案じ、

苦しんでいる。彼の悲しみが、悲しかった。思わず、美央は、嶺を、抱きしめた。

「美央」

悲しみは、同じだった。嶺は、美央を抱きしめ、泣き出した。声を殺し、美央の横顔に、うなだれて・・・。

外は、雨が、降り出していた。まるで、莉音の涙のように。

君の心にすむ者

外は、ピンクの海が広がっていた。桜が、満開だった。屋上から、広がる景色は、どこも、ピンクの小高い山々が、広がり、なんともいえない景色が、広がっていた。ピンクの濃淡。所々に、黄色いじゅうたんが広がり、陽の暖かさに、甘い、香りが、立ち上っていた。「判るか？ 莉音？」

莉音の瞳は、開かれたまま、遠い景色を映し出していた。もともと、色素の薄い両目に、通りすぎる新幹線が、反射してみえた。だが、莉音の瞳は、光をおう事は、なく、意識もなく、見開かれたまま、そこに、あった。点滴のチューブが、日の光を反射していた。

「桜。咲いたんだよ……。一緒に見に行きたいって、いつてたよね」

とりあえず、命は、とりとめたものの、莉音の意識は、戻らなかった。目をあけ、時折、眠ったりは、するが、発言はなく、立ち上がり、歩く事もなかった。ただ、そこには、莉音の顔をした人形がいるのと変らなかった。

「俺が、無理に離れなければ……。」

風が冷たくなってきたので、嶺は、カーディガンを莉音にはおらせた。遠くから、桜の花びらが、風に乗ってくる。嶺は、車椅子を押し、部屋に戻ろうとすると、後ろから、そっと、近寄る影があった。莉音の夫であった。

「こんにちは」

逆光で、まぶしいのか、莉音の夫、陸斗は、目を細めた。「七藤さんですね？」

陸斗は、そばにあるベンチに座るよう、嶺をうながした。

「莉音。あなたが、来るのは、判るみたいなんです」

嶺は、陸斗の顔をみた。それは、莉音と嶺の間を知っているというように、聞こえたからだ。

「すみません。あなたが……。あの時のあなたを見た時に、僕は、気づいてしまつて。」

優しい莉音の夫。持っていた、嶺に渡そうとしていたのか、缶コヒを、手の甲が、白くなるまで、握り締めていた。

「莉音の思っていた人は、あなただったんですね？」

真つ直ぐな目で、嶺を見つめていた。

「莉音さんは、何かいいましたか？」

呼び捨てになりそうなのを、あわてて、さん付けに直した。

「いえ。何も、言わなかったんですけど。一緒にいるとわかるんです。心の中に、僕じゃない。誰かがいるって事が。」

嶺をじつと、陸斗は、見つめ続けていた。嶺が、なんて、答えるか、身構えているかのように。

「すみません。」

嶺は、まず、そういった。

「彼女を愛しています。」

「ふっ……。」

陸斗は、笑った。

「今の状況でなかったら、殴ったかもしれませぬね。」

莉音の車椅子を、押す手を、嶺から、陸斗にかわった。

「でも、僕が、話しかけても、何もかわらないのに……。七藤さんが、話かけると、表情が、和らぐんです。あなたは、気づいてましたか？」

愛おしそうに、陸斗の手は、莉音の頬を撫でていた。

「この人の、心の奥に届いているのは、七藤さん。あなたの、声だけなんです。」

嶺の目から、涙がこぼれた。自分だって、莉音の声が聞きたい、そこにある、両目で、自分を見つめて欲しい。こんなに、傍にいないのに、莉音には、届かない。

「あなたが、莉音を愛しているのは、わかります。でも、僕は……。」

陸斗は、寂しそうに、笑った。

「悔しいけど……。彼女を譲る事は、出来ないんです。」

「柴崎さん！」

嶺は、遮った。

「お願いです。せめてもの、お詫びに……。彼女の意識が戻るまで……。面倒を見させてもらえないでしょうか？」

「それは、無理です」

「お願いです。」

「どうして……。彼女が、事故になったか。考えてみたんです。」
陸斗は、続けた。

「携帯に気をとられたようなんです。彼女の膝の上に、落ちてて……。救急隊員が駆けつけた時、何て言っていたか、聞きたいんですか？」

その声は、裁判の判決を言い渡す調子にも、似てた。冷静で、感情を殺した声。

「嶺の電話に出なきゃって。履歴にも、ないのに。ずーと、あなたから、電話がかかってくるのを、いたんですよ！」

ああ……。莉音は、自分を待っていた。判っていたけど。別れるって、きめたあの時から、連絡はしないって。決めていたのだ……。自分だって、莉音に逢いたかった。

「だから。すいません」

嶺の手をはらいのけ、陸斗は、車椅子を押し始めた。

「好きだから、愛しているからって、幸せに出来なければ、何の意味があるんです？ 莉音を、あなたは、幸せに出来るんですか？」

そうだ。どんなに、切なく思い焦がれたとしても、相手を不幸にしては、いけない。幸せにできるのは、自分でないかもしれない。現に、自分は、今、他の女性と、結婚しようとしているではないか……。何も、言えない。黙って、陸斗に、押されていく車椅子の莉音お後ろ姿を見送るしかなかった。こんなに、莉音を愛している。莉音も、きっと。でも、もう。本当に、逢えなくなるのか……。せ

めて、命が助かった事だけを、喜ばいいのか・・・。遠く、桜の花が、儚く、しらじんでみえた。

それぞれの思い。

温かい中に、自分は、いた。胎内の様な安心感があつた。周りは、優しいピンクに包まれ、それは、満開の桜のようでもあつた。体をゆっくりと動かす……。指先の感触を確かめるように、手の平を開き、また、こぶしを握ったりしてみた。誰かが、自分を呼んでいる……。懐かしい声。両脚を抱き、両膝に頬を摺り寄せた。……誰だろう……

莉音は、声のする方を、見上げようとしたが、何も、見えなかった。と、いうより、体が、動かなかつた。遠い声を、思い出せと、心が叫んでいた。思い出さなければ、いけない。大切な人。誰かが、自分を待っている。

切ない夢だつた。

美央は、明け方、目が覚めた。出社するには、まだ、早い。時計を見やりながら、ノンカフェインのコーヒーを入れ始めた。携帯の、メールのチェックした。嶺からは、特にない。あれ以来、嶺は、心が、壊れてしまったかのようにだつた。ささやかな、式を挙げる予定だつたが、嶺のあんな様子で、すっかり、遅れてしまっている。少しずつ、大きくなつてくるお腹を、気にしつつも、嶺の心に、自分の入りこむ隙もない事も、この子の事を、心配してくれる事もないのを感じ取っていた。自分は、本当に、嶺を愛しているのだろうか……。これは、愛では、なく。執着では、ないのか。このお腹の子さえ、いれば、三人幸せになれると思っていたのは、間違いなのか。今の嶺は、魂の抜け殻だ……。あの、莉音は、嶺の意識まで、自分と一緒に、記憶の奥底に沈めてしまった。

……。嶺……

美央は、泣き出した。このままでは、自分は、幸せになれない。嶺と、一緒にいたい。そう、思っていた。だが、今の嶺は……。

・・・もう、戻れない・・・

美央は、嶺に、メールを打ち始めた。

嶺も、切ない夢を見ていた。あれから、自分の時間が、すっかり止まっていた。手術室に、駆けつけた嶺が、思わず、泣いてしまった。会社側は、何も、気づかなかったが、莉音の夫、陸斗には、すっかり悟られてしまった。あの、屋上であつた日を最後に、莉音には、逢えてなかった。もう、別れると、決めたあの日に、莉音の思い出の物は、全て、処分してしまっていたから、何一つ、莉音の思い出の物は、なかった。莉音のあの、笑顔を思い出そうとしても、目に浮かぶのは、人形の瞳をした、表情のない莉音だった。

・・・莉音・・・

夢の中に、莉音は、いた。長い髪をまとめ上げ、浴衣を着たあの日の、莉音のままだった。顔がよく見えない。

・・・莉音！・・・

声をかけようとしたが、莉音は、ずっと、消えていなくなってしまった。声をあげて、泣いてしまいたい。哀しくて、哀しくて。莉音を自分の傍に置こうと、出来なかった自分の非力さをのろった。

「莉音」

声が、漏れた。誰の声かと思ったが、自分の声だった。目をあけると、目尻から、温かいものが、零れ落ちるのが、わかった。涙だった。

・・・いつも、この夢をみる・・・

心が、莉音を求めていた。起きて、窓を開けてみた。冷気が、入り込んできた。春とは、いえ、まだ、朝は、寒かった。と、携帯が、メールを告げた。美央から、だった。

・・・今日、時間があいてる？・・・

美央と、逢っていて、心は、虚ろだった。一度は、一緒に生きようと考えていたが、もう、心が、折れてしまった。今は、莉音に悔しい。

・・・逢えない・・・

・・・これからの、事を考えて！・・・

・・・こんな気持ちのまま、先には、進めない。こんな俺で、気にならないの・・・

・・・それでも、この子には、生きる資格は、あるでしょ？・・・
・・・わかった・・・

そうだ。先に進まなくては、ならないのだろう。自分の気持ちも。

莉音への気持ちも。置いたまま、時間は、流れていく。自分の、気持ちちは、もう、莉音と一緒に、どこかへ、消えてしまった。こんな抜け殻のような男を、必要として、生まれてくる子が、いるのか。

・・・美央。君の意思にまかせるよ。全ては、君のままに・・・

嶺は、美央と逢うため、仕事を今日も休む事にした。

莉音は、眠っていた。ずっと、あれから、ほとんど、眠っている。

意識をとりだしたような、目を開けるのは、一日のうちの、ほんの僅かな時間だった。それは、嶺のくる時間。何故か、嶺の来る少し前になると、待っていたかのように、目を覚ますのだった。だが、最近。嶺の訪問を陸斗が、断ってから、その時間も、少なくなっていた。気のせいか、どんどん莉音は、痩せ衰えていった。

「莉音」

陸斗は、懸命に、莉音の看病をしていたが、結果は、余りいいものでは、なかった。

「俺じゃ、ダメなのか・・・。莉音」

莉音の、目は、閉じられたままであった。

莉音と生きる。

美央と、嶺は、逢う・・・はずであった。・・・が、嶺の向かったのは、莉音のいる病院の、喫茶室であった。真向かいにいるのは、紛れもない莉音の夫。陸斗である。

「もう、逢いに来て欲しくないって、いった筈ですよね」

陸斗は、静かに、迫力のある声で、言った。

「何を、言われても、覚悟する気持ちで来ました。」

嶺は、しっかりと、陸斗を見据えた。

「間違っていると、思っています。あなたに、これをお願いするのは、でも、それでも、僕は、気持ちを伝えたい。そう、思って、僕は、今日、来ました。」

嶺は、椅子をひいた。

「何を言い出すつもりだ？」

「莉音さんを、僕に下さい。！」

「はあ？冗談だろう！何を言い出すつもりだ？」

嶺は、陸斗に、土下座していた。

「馬鹿を、言っているのは、わかります。でも、莉音の傍にさせてください」

気がつく、陸斗は、嶺の胸ぐらを掴みあげていた。

「あまり、怒らせないでくれ！」

「本気です。」

嶺も、負けていなかった。喫茶室は、さほど、人がいなかったが、2人のただならぬ、雰囲気にもわりの、ざわつき始めていた。

「莉音と一緒に痛いんです。」

嶺は、陸斗の手を振りほどいた。

「莉音と別れてほしいんです。」

「ふざけるな！」

「あきらめません。ようやく、わかったんです。遅すぎたのかも、

しれない。だけど、今、決心しなければ、後悔する」

嶺と陸斗は、激しく睨み合った。

「僕は、莉音を選びたい。何よりも、そうしたい。あなたから、莉音を奪いたいんです。」

「許さない。俺は。こんな事、あつては、いけないんだ。」

「今日は、これで、失礼します。だけど、莉音は、僕を待ってると思います。」

「・・・」

陸斗は、言葉を失った。嶺は、陸斗に軽く、一礼をすると、伝票を、掴み上げ、喫茶室を出て行った。これで、いいんだ。何を迷う必要がある。美央の事は、解決しなければ、いけない。だが、今、一番、自分が、守らなくては、いけないのは・・・後悔する訳にいけないのは、莉音の事だった。あの日、初めて、強く、思った。失いたくないと・・・どんな形であれ、莉音を手に入れたいと・・・今、動かなければ、後悔する。莉音と、一緒に生きよう。その為に、誰かを傷つける事になるかもしれない。だけど、大切な人を傷つける訳には、いかない。・・・そう、決めた。嶺に、迷いは、なかった。自分が、周りを、傷つけまいとしたばかりに、莉音を傷つけてしまった。本当に、遠回りをしてしまったが、結論は、でた。莉音と生きる。美央に、そう告げよう。彼女の、心も体も傷つけるだろう。だが、もう、迷いは、許されない。

嶺は、新幹線に乗り、美央の待つ街へ、向かった。

流れる……

美央は、待っていた。嶺が、自分に逢いに来てくれるのを……。2人よく行った駅ビルの、最上階。街並みが、よく見えるラウンジで、嶺が来るのを、待っていた。

最初は、少し遅れるとメールがあつた。1時間くらい？と思っていたが、時間は、段々遅れ、午後になっていた。雨が降り出し、少し、温度が下がってきた。妊娠している美央に、同じ姿勢で、待ち続けるのは、辛かつた。

……でも……

もう、答えを出そう。莉音の件で、遅れてしまったが、ここまで、きた以上、嶺と一緒にいるのが、一番いいのだろう。莉音には、そんなに素敵な夫が、いる。それは、嶺もわかつただろう。そして、莉音と別れる気はない。もう、嶺は、魂を抜かれた状態で、もしかしたら、もう、自分の事を、振り向いてくれないかもしれない。それでも、美央には、嶺に傍にいて欲しかった。

……もう、少しだけ、待とう……

バッグには、婚姻届を入れてきた。自分のサインは、してある。嶺と、そのまま、届けに向かうのだ。携帯がなつた。

「はい」

嶺から、だつた。

「遅くなつて、ごめん。今、下に着いたから。」

「良かった。待ってるから。いつもの所だか……」

言いかけた。エスカレーターを、振り返り、嶺が、上ってくるのを、確認しようと、振り返りうとした。……その時。

「あっ！」

美央が、叫んだ。柱から、幼稚園児くらいの子供が、2人競い合いながら、飛び出し、美央の、お腹にあたり、いきなり、転倒した。子供は、跳ね返り、臀部から、落ちたのだ。

「だ・・・？大丈夫？」

美央は、駆け寄り、子供を抱き起こそうとした。

「っ・・・！」

激痛が、下腹部を襲った。

・・・え？・・・

恐る恐る美央が、自分の、下腹部を見下ろすと、何かが、流れていく感触が、あった。暖かいもの。

それは・・・。

「大丈夫ですか！」

子供の、母親と思しき女が、叫びながら、美央に駆け寄った。美央の、脚の間から、赤いものが、流れ落ちていた。

・・・痛い！・・・

美央は、思わずしゃがみ込んだ。

「誰か！救急車！」

叫ぶ人達の中に、嶺の姿をようやく、みつけた。

不安定な三角形。

桜の花びらが、散っていた。何処までも……。甘く、なんとも
言えない香りが、する。遠くも見えないほど、桜は、散っていく。
後から……。後から。

……。莉音……。

嶺は、振り向いた。莉音が、立っていた。あの日と、同じく。紫色
のワンピースを、着て。笑っていた。変らない。変ってしまうのは、
自分だけなのか……。莉音の、長い亜麻色の髪が、散っていく桜
の中で揺れていた。

……。逢いたい。莉音……。

莉音は、まだ、たくさんの、チューブに繋がれたまま、なのか……。
切なに、嶺は、莉音を求めている。声が、聞きたい。莉音。何が、
あっても、そこに、行きたい。嶺は、そう思っていた。……。が。
美央が、倒れた。嶺が、そこに、着いた時、美央は、血黙りの、中
にうずくまっていた。

「美央！」

嶺は、人込みをかきよけ、美央に、たどり着いた。周りの、人々の
ザワメキだけが、耳につく。嶺は、美央を抱き寄せた。

「嶺？」

待っていたと、ばかり、美央は、嶺の首に抱きついた。

「待っていた。」

激痛が、走るのか、美央は、顔をしかめた。

「私、どうにか、なっちゃうの？」

美央の、右手が、床に触れた。すぐ、血にそまつた。

「赤ちゃん。赤ちゃんは、大丈夫なの？」

思い出したように、美央は、叫んだ。

「嶺！あなたとの、この子は、大丈夫なの？」

真剣な顔で、嶺の両腕をつかんだ。

「嶺！助けて！」

「大丈夫だ。大丈夫だから……。」

嶺は、美央を強く、抱き寄せた。

遠から、救急車のサイレンが、聞こえてきた。

桜が、散っていた。後から。後から。繰り返す。色の薄い、濃い。入り混じり、他には、何も見えない。風が、起り、桜の香りが、強くなった。

……莉音……

嶺は、莉音を、探していた。

……莉音……

桜の花びらが、幾分、雨を含んだのか、しつとりしてきていた。雨が、降り出すのか……。空は、影つてきていた。

……嶺……

そこに、莉音は、いた。

……私達、もう、会えないの？……

……逢えるよ……

嶺は、声の方を振り返ろうとしたが、莉音の姿は、見えなかった。

……莉音……

嶺は、探した。

……嶺……

振り返った所にいたのは、美央だった。

……嶺……

美央は、嶺に、手を差し延ばしていた。

……嶺。来て……

嶺は、ためらった。ためらっている内に、美央は、桜の花びらに、隠れ、見えなくなってしまった。

「美央！」

叫んだ声で、嶺は、目を覚ました。

「起きたました？」

穏やかな声が、聞こえた。嶺は、いつの間にか、美央のベッドの脇で、眠りについていたらしい。点滴の様子を見に来ていた看護師が、嶺に微笑みかけた。

「良かったですね。大事に至らなくて・・・。」

何とか、お腹の子は、もったらしく、美央は、落ち着き、眠りについていていた。莉音の夫と、話し合い、美央の、診察に付き合っていた嶺は、疲れ果て、美央が、休んでいる時に、居眠りをしてしまったらしい。

「眠ってしまったんですね・・・。」

嶺は、頭を、掻いた。

・・・夢だったのか・・・

嶺は、まだ、眠りにつく、美央を見つめた。

・・・この子は、助かった・・・

生まれるべき命なのか・・・。

・・・莉音。僕は、君と生きて行きたい。だけど、どうしたら、一緒に生きていける？・・・

嶺は、こぶしを、強くかんでいた。

涙での結婚。

窓から、夕日が、差していた。美央が、目を覚ますと、夕日の中に、見慣れた人影があつた。嶺だつた。

「嶺」

もしかしたら、逢えないかもしれない。不安が、よぎっていたが、自分の意識が遠のくなか、しっかりと、自分を抱きかかえてくれたのは、嶺だつた。

「嶺。居てくれたの。」

「ずーと。」

嶺は、美央の手に、そつと、触れた。

「ここに居た」

「そう」

美央は、ゆつくり微笑んだ。

「昔みたいね」

そう。大学の時と変わらない。嶺は、自分だけを見つめてくれている。昔と変わらない。じつと、自分をみつめ、傍に居てくれる嶺は、大学時代と、何一つ変らなかつた。

「そうだね」

嶺も、笑つた。

「・・・でも・・・」

美央は、思つた。変つてしまった。ここに、嶺は、居てくれる。でも、嶺の心は、あのひと、所に沈んだまま。遠い意識に海へ、今も、一緒に、沈んでいる。それは、いつ、戻るかも判らない。嶺の心を、捕らえ、離さず、共にある。自分の、傍にいる嶺は、抜け殻でしかない。それでも、一緒に居たいと、願う自分が、悲しかった。こんな男忘れたかつた。自分を愛し、自分だけを、見つめていてくれた、この男は、もう、変つてしまった。もう、あの自分だけを、見つめてくれた嶺では、ない。心が、なくても、自分は、いてほしいと思

うのか……。惨めでは、ないか。傍に、嶺が、居てくれればいい。取り上げられたおもちゃを取り戻すかごとく、計った妊娠で、あつたが、嶺の心が、最早、自分のものにならないと、思い知るだけの結果になっていた。もう、止めようか……。もう、この人を、縛りたくない。心配し、抱き寄せてくれた、あの時に、感じた。この人は、こういう人だ。だから、自分は、愛した。もう、自由にしてあげよう。あの人の、海にこの人を、還してあげよう。それが、自分が、嶺という男を愛した証だ。

そう、思うと涙が、あふれて来た。とまらない。目尻を次から、次へと、塗らす涙で溢れていた。

「あのね……。嶺」

嶺をみつめた。涙が止まらない。初めて、素直になれた気がしていた。

「美央。」

嶺が、美央の涙を、ぬぐった。

「結婚しようか……。」

嶺は、言った。

「俺は、莉音を愛してしまった。それでも、君が、受け入れてくれるなら……。一緒に、その子を育てたい。」

「嶺」

嬉しい。でも、もうすこし、前なら、もっと、嬉しく感じられた。でも、今は。

「嶺。」

美央は、受け入れるだろう。そう思った。……が。

「もう。いいから。あの人の所に行つて。」

美央は、首をふった。

「この子は、あたしが、育てる。ここに、気持ちのない嶺に居てもらつても、嬉しくない」

「美央。」

「あたしを、見てくれない嶺にいられても、辛いだけなの。」

「美央。ごめん。今の俺は、莉音しかみれない。だけど。」

「子供の事？」

嶺は、辛そうだった。辛そうに、自分の子供を心配する嶺に、美央は、腹が立った。

「あたしが、育てるの。愛してくれない人に、居てもらっても、嬉しくないって、言ってるでしょう！」

それは、裏返すと、愛して欲しいと、聞こえた。嶺には、美央の、気持ち、わかっていた。

「美央。すまない」

「何を、誤ってばかり！」

「すまない。」

「あたしが、言って欲しいのは、そんな言葉じゃない。義理で結婚してもらっても、嬉しくない。あたしが、欲しいのは、嶺の心なの！」

一度に、感情が、爆発した。涙も止まらない。悔しいけど、鼻水めで、出てしまった。思わず、傍にある枕を投げつけてしまい。枕は、傍にあった花瓶にあたり、騒々しい音をたてて、花瓶は、床に落ちていった。

「嶺。それでも。心が、無いと、判っていても……。あたしは、嶺と居たいと思ったりするの。どうして、どうして。こんなに、嶺が、好きなのに……。判ってくれないの……。」

美央は、両手で、顔を、覆い嗚咽を漏らし激しく泣き出した。こんなに、美央を苦しめている。かつて、愛した人。この人を、自分は、愛おしく思った日もあったのに。自分は、苦しめている。

「美央。少しだけ……。待ってほしい。少しだけ。君を愛せるように、なるのに。」

嶺は、美央の両手に、自分の右手を重ねた。

「少しだけ。」

美央は、涙に、濡れた顔を出し、嶺に、そっと、キスを求めた。

君に住みたい。思う者。

莉音は、ずーとベッドに、座り続けていた。何を見る訳でも、なく、時折、瞬きをする瞳には、誰を写す事もなく。その瞳は、淡い茶褐色に、輝き、半眼で、自分の心の淵を見ているようにも、見えた。陸斗は、仕事が終わると真っ直ぐ、莉音の、いる病院に、向かっていった。何度きても、様子は、変わらず、どうにか、食事を、介助すれば、取れるまでには、なっていたが、自発的に、発言する事もなく、まるで、お人形さんのような様子へと、変っていた。

「俺じゃ、駄目なのか」

陸斗には、莉音が、誰を待っているのか、痛いほど、わかっていた。かといって、それを認めてしまうのは、自分の莉音への愛情を否定されてしまうようで、認められないでいた。シヨックだった。友達の紹介で知り合い、ごく普通に結婚した。穏やかで、可愛い人だと思っていた。料理好きで、一緒に、よく、料理をした。何度、思い返しても、自分の知っている莉音と、あの若い嶺という男の知っている莉音は、別の女性に思える。でも、本当の莉音は、あの若い男と一緒にいる莉音なのだろう。夫の直感だった。あんな、若い男に負けてしまう事も、プライドの高い陸斗には、耐えられない事だったが、そのプライドも、嶺と一緒にいる嶺を、見た時に、もろく崩れ果てた。

・・・この2人の間に、自分は、入れない・・・

陸斗が、感じた瞬間だった。莉音は、嶺という男を求めている。認めたくない事実だった。陸斗は、外から、莉音のいる病室の光をみつめ、そっと、帰る事にした。窓辺に、その嶺の影が、浮かび上がる事に気付く事なく・・・。

「莉音。来たよ」

嶺は、美央と、別れた後、真っ直ぐ、莉音の元に戻っていた。

「報告しなければならんだ」

嶺は、莉音の隣に座った。

「聞いて欲しい。」

嶺は、莉音の右肩に、腕を廻した。細くて、あの日より、細くなりすぎた肩。長く伸びすぎた髪は、うねり、いつも、クセ毛を、嫌がっていた莉音の口癖が、懐かしい。

「莉音。一緒にいたいと、思う気持ちに変わりはない。ずっと、一緒にいたい。だけど・・・。莉音。」

莉音は、嶺が、自分に話しかけるのが、わかるのか、声のする方を模索するかの陽に、瞳を動かしていた。だが、嶺の姿を、上手く、捉える事は、出来ない。

「莉音。愛してる。キスしてもいい？」

嶺は、莉音の、頭を、軽く抑え、髪を撫でた。久しぶりの、莉音との、キス。乾いた莉音の唇だったが、嶺の、唇で、少しだけ、潤った。一度、唇を離れた。が、また、唇を合せたいという衝動にかられた。最初は、軽いキスのつもりだったが、嶺は、貪る様に、今までの、時間を埋めるかのように、莉音の唇を貪った。先ほど、美央と、重ねたキスとは、違う。莉音を求めるキス。

「莉音・・・。」

嶺は、莉音の額に、自分の額を押し当てた。

「莉音。あと、少ししか、時間がない。俺達、いつかは、別れなきや。別れなきやっていたよね。本当は、その時は、別れなくて、良かったんだよ。」

莉音が、愛おしい。

「少しでも、一緒にいたかった。莉音。」

莉音の傍にいたい。願わくば、この心だけでも、傍に置いて欲しい。

「俺の我がままなんだ。莉音。俺さ・・・。」

もう、一度、莉音にキスした。

「美央と結婚する。」

鼻先を、莉音に押し付けた。ひんやりとする莉音の鼻先。本当に、お人形さんに、なってしまったんだろうか。

「守らなければ、いけない事が、出来たんだ。莉音。判ってくれるね？」

嶺は、莉音をみつめた。莉音の、瞳が、少しだけ、潤んだように、見えた。それは、睫をぬらし、やがて、あふれ出て、目尻をぬらし、頬へと零れ落ちていった。

「莉音？」

嶺は、両手で、莉音の、両目を凝視した。

「判るのか？わかるのか？莉音……」

嶺は、莉音の両目を、覗き込み、莉音の、名前を何度も、叫んだ。次から、次へと、涙は、あふれるのだが、その瞳に、嶺の姿をはつきり捉えることは、なかった。単なる偶然だろうか……

「莉音……。頼む。戻ってきてくれ！時間が、ないんだ……」

頬を押さえ、瞳を、覗きこむ。この、どこかに、あの英 莉音がいる。嶺は、願いを込め、莉音の意思が、そこにあるかのように、話しかけようとしたその時

「また。おまえか！」

振り返ると、かえった筈の、陸斗が、恐ろしい形相で立っていた。

「莉音は、渡さないって、言った筈だよな……」

見ると、陸斗が、持っていた紙袋から、出したのは、小さな果物ナイフだった。

「ずーと。考えていた。莉音の事を。どうしても、心が……。お前の、所から戻らないなら、どうしたら、いいかを……」

嶺は、じっと、陸斗のこれから、起そうとしてる行動を、模索した。

「莉音の、心が、私の所に、戻らない。それなら……。私は！」

陸斗が、刃先を、振り落としたのは、莉音にむけてだった。

未来切り開くナイフ。

恋は、人を狂気に駆り立てる。陸斗あり、そんなつもりは、無かったと思う。あのまま、帰ろうと、思った道の途中で、オレンジをかけ、オレンジの好きな莉音に届けてやろうと、果物ナイフを買い、病院に向かった。病室めで、来て、莉音と嶺のキスシーンを見てしまったものだから、逆上してしまった。前回、嶺に、莉音が、欲しいと言われた日から、その思いは、首をもたげていたのかもしれない……。いっその事、自分の物にならないのなら、この手で、奪ってしまおうと……。紙袋から、抜き取られた、光る果物ナイフは、真っ直ぐ、莉音へ、突き立てられようとしていた。

「莉音！」

黙って、莉音が、刺されるのを、見ている訳では、なかった。果物ナイフが、しっかりと刺していたのは、嶺の左肩だった。

「つう……。。」

嶺は、苦痛に顔をゆがめた。が、尚も、陸斗は、手を緩めなかった。莉音を庇い、抱き寄せる嶺の腕を、振りほどき、莉音の首を絞めようと、執拗に、陸斗が、襲う。

「ナースコール！」

嶺が、手を伸ばし、コールした時に、不覚にも、バランスを崩し、嶺は、莉音をかばう形で、床に、落ちてしまった。

「大丈夫ですか？」

騒ぎを、聞きつけた隣の病室の、見舞い客が、顔を覗かせた。

「うわっ！」

見るなり、あわてて、先生と叫びながら、廊下へ、駆け出した。嶺の左肩が、変な形で、着地し、果物ナイフが、突き刺さったままだった。莉音の頭を庇いながら、ベッドから、落ちたせいか、嶺の胸に、しっかりと、莉音の体は、無事にあった。……。が、おびたらしい血が、床を染め、噴出した血液が、莉音の、顔といわず、体を

染めていた。ナイフが、刺さったまま、落ちたせいで、傷が、縦に裂けていた。

「どうしました？」

ようやく、看護師が、顔を覗かせたのは、呼びつけられた医師が、来る、ほんの、少し前だった。騒ぎを、恐れ、陸斗は、姿をくらませていた。

「ちよつと、手を滑らせてしまつて……。」

「手を滑らせたようには、見えないな」

嶺は、少しだけ、起きようとした。ものすごい、血の臭いだ……。自分の血液の臭いだとか、痛みだとか、その時の、彼は、感じなかった。莉音が、少し、表情を変えた様な気がした。

「莉音？」

嶺は、莉音に、向き合つた。

「莉音！」

ゆつくりと、唇が、何かを、言っている。

「れ……い……？」

「莉音！」

じつと、見開く瞳は、間近に居る嶺を、見つめていた。

「莉音。」

嶺は、真っ直ぐ、莉音の、顔をみた。痛みを忘れ、久しぶりに見る愛しい莉音の顔だった。

「待つてた。嶺……。あたし」

莉音は、言いかけたが、すぐ、駆けつけた医師達に、引き離されてしまった。嶺は、応急処置をする為、処置室へ。莉音は、診察をする為、ベッドの、周りをカーテンで、覆われてしまった。

「莉音。莉音が……。還つてきた……。」

嶺から、長く、深いため息が、溢れ出ていった。永く、永遠とも思われた深い記憶の、海から、莉音は、戻ってきた。嶺の、魂を、握り締め、今、莉音は、ようやく、嶺と、向き合う事になるだろう。

間に立つ者。

「それで、お前、相手訴えなかったの？」

慶介が、憤慨して言った。嶺の部屋からは、真っ直ぐシヨツピングセンターの灯りが見える。遠く見える山のとっぺんに、何棟もの、テレビ塔が見える。いくつもの、ネオンが見え、様々な、光を呈している。何度、この部屋で、莉音と、この景色をみた事か・・・。

「うん。人の事、言えないと思ってさ・・・。」

嶺は、コーヒーをカップに分け、慶介に差し出した。怪我したのは、左肩ですんだので、コーヒーを分けるのは、何なかった。が、少し、痛む。

「本気で、考えなきゃ。なんだ。」

「お姫様が、目を覚ましたしな。」

「そうなんだ。」

「お前としては、どうなの？」

嶺は、カップに、唇をあてたまま、遠い目をした。

「まず、莉音は、あの旦那の所へは、帰せないと思っている」

莉音は、まだ、しばらくは、入院が、必要らしい。その後の事を、考えると、嶺は、思い悩むのだった。

「美央に、結婚を申し込んだ」

思い出して、慶介に、報告した。

「はあ！」

慶介は、呆れた。

「そこまで、責任とるのか？お前の、一緒に居たいのって、莉音じゃなかったか？」

「そうだよ。それは、変わらない」

「じゃあ、一緒にいろよ」

「居たいさ」

「お前の中途半端な、優しさが、周りを傷つけんだよ。中途半端なんだよ。美央に対しても。莉音に対しても。お前の本当の気持ちを伝えて、行動にうつす。誰も、傷つけないなんて、出来る訳がない。傷つけた分、幸せになるしかないんだよ。」

嶺は、答えなかった。ベランダに出ると、夜気が、気持ちよかった。もう、季節は、初夏にうつりはじまっていた。

「結婚すれば、気持ちちは、変わるのか？」

慶介は、静かにきいた。

「俺には、二人共、不幸になるしか、思えない。嶺？莉音は、知っているのか？お前の子供が、生まれるって、話。残酷な、話だと思わないのか？」

言いそびれた、一番大切な話。莉音との、時間は、あの日止まったまま……。嶺と美央の、時間から、遠く隔たったままなのである。今、居る二人の、位置を、莉音が、知ったら……。

「様子を見て、話そうかと思っている。それで、莉音の気持ちを確かめたいと、思っている。」

携帯が、美央からの、メールの着信を知らせた。

「……おやすみなさい。……」

美央からの、お休みメールだった。

美央は、莉音の事を知っている。莉音は、まだ、美央の状況に、気付いていない。誰か、周りから、知らされる前に、嶺は、話す必要があった。

「なるべく、早いうちに話すよ。」

嶺は、携帯を、キッチンのカウンターに、放り出した。莉音には、自分から話す。何とは無く、嫌な予感がしていた。

思いは、一方通行。

部屋、一杯に、イチゴの甘い匂いが、広がっていた。季節も盛りの、赤いイチゴ。大粒のイチゴが、箱一杯に並んでいた。

「へえー！奮発したねえ？」

所々に、赤いリボンが、飾り付けられている。

「もう、退院なんだけどね。」

「いい匂いー」

美央は、イチゴを、一つ摘むよ、口に放り込んだ。

「よく、ここが、わかったわね！」

「うん。拓斗から、メールもらったんだ」

美羽は、ベッドの脇に腰掛けた。

「あいつ。今でも、美央の事、忘れられないのかなー。なんて、思っちゃうんだけど」

拓斗とは、嶺の大学からの友人で、もう、1児の父親でもある、年上の同級生である。美央の事が、好きだったが、あっさり、美央に振られて終わっていた。

「まさか。」

美央は、打ち消した。

「やっぱさー。あたしが、言ったじゃん。拓兄と、一緒のほうが、美央は、幸せになれるって。どうして、嶺が、好きだったりするの。」

真似て、美羽も、イチゴをつまんだ。ショートヘアの美羽の髪が、陽を受けて、キラキラ輝いている。

「・・・そんな事、言って。自分だって、嶺の事が、好きだったクセに・・・」

思ったが、美央は、口に出さなかった。

「明日。退院する」

「親は、どうするの？おばさん。どうしてた？」

「うん。嶺が、話してくれてたけど。」

「それは、結婚するって事？」

いぶかしげに、美羽は、聞いた。

「嶺は、近いうちって、言ってた。」

「良かったじゃん。」

「全然。」

美央の意外な反応に、美羽は、面食らった。

「嬉しくない。」

美央は、言った。

「前は、それでも、良いと思っていた。嶺さえ、傍に居てくれれば、でも、本当に、あの人。あたしの事なんて、これっぽちも、思っていないって事に気付いたの」

不思議なくらい涙は、出ない。

「どうして、だろうね？この子が、大きくなれば、大きくなる程、がんばれって、声を掛けられてくるみたいで・・・」

美央は、お腹の子が、愛おしいようだった。

「傍に居てくれるなら、あたしを見て欲しいって、思ったの。気持ちが無いなら、居てくれなくてもいい。」

「そうなの？美央。あなた・・・強く、なったわね」

「そうじゃないんだ。かなわないって。思ったの。あの事故の日に」
莉音が、運ばれたあの日。嶺は、泣き崩れていた。あの、周りを気にせず、泣き崩れる嶺をみて、悟ってしまった・・・。

「でもね。この子に、父親は、必要なの。だから、一時だけはね。夫婦で、いないと」

「そんなの！」

美羽は、言いかけて、辞めた。自分は、今、恐ろしいことを、口に出そうとしていた。

「・・・判ってる。でもね。できないよ。」

察して、美央は、応えた。

「だって、好きな人の子供だよ。嶺は、あたしの物にならなかった

けど。この子は・・・。」

美央は、愛おしそうに、お腹を、撫でていた。バカげている。一人で、子供を育てると、いうのか・・・。美羽は、言い出せずにいた。美央の、母親から、相談を受け、子供をおろすよう、説得するように、頼まれていたことを。

「美央。本当にいいの？」

「そう。最初から、そのつもりで、いたんだもの」

「バカだよ。美央は。」

美羽は、拓斗が、美央を、忘れずにいる。そんな理由が、判る気がしていた。

あなたに、逢う為に。

ずっと、時は、とまっていた。嶺と別れた時から、季節は、止っていた。心は、死んでいたと思う。あの、瞬間から。メールの無い時間が、耐えられなかった。絶え間なく、続いたメールは、別れた瞬間から、止まったままだった。あんまり、辛いから、受信メールの、内容も、散々悩んで、消去した。それでも、メールが、届くサインが、出ると、嶺かと思ってしまつたので、紛らわしいお店の、メールとかは、着信拒否を設定したり、していた。こんなに、嶺のメールに、縛られているとは、思ってたなかった。だから、仕事に専念しよう、と、思っていた。夫は、優しい。限りなく。かといって、今更、夫を愛するなんて、都合のいい事は、莉音には、出来なかった。殉死という言葉があるなら、自分は、嶺への愛に殉死したい……。そう、思っていた。そこへ。あの事故だった。嶺からの、メールを待つ心が、事故をよんだ。

「ずっと、意識が、無かつたんですよ。でも、あの、ほら。背の高い。素敵な彼が来た時だけ、表情が変わっていうか……。」

うつすらと、事情をしている顔馴染みになっている掃除のおばさんが、莉音に笑いかけた。

「いい男だもんね。」

「そんな……。」

多少の会話が、出来るまでには、回復してきていた。何とか、記憶をたどる。なんとも、鮮明なのは、嶺への刹那的な思い。そして、今だに、理解できないのは、夫の嶺への行動。認めたくない思いが強く、理解できない。夫が、嶺を刺した？ いや……。誰も、そんな事は、言っていない。気が付くと、嶺の腕に、自分は、居て……。腕からは、おびただしい血。鼻をつく匂い……。嶺は、何も言っていない。自分で、怪我したただけだと……。誰も何も、言っていない。でも、自分の、勘が、叫んでいた。あれは、夫の仕業だと……。

莉音は、夫が、自分では、なく、嶺を、狙って、刺したと、思っていた。もし、そうだとしたら、自分のせい？夫を、あの、穏やかな、あの人を追い詰めたのは、自分。

「うつ……。」

莉音は、吐き気が、した。自分の、嶺への思いの影で、苦しんでいる人がいる……。やっぱり、幸せになんて、なれる訳がない。不倫なんだ……。恋じゃない。何度も、嶺の別れを告げられたとき、そう、思い込ませようと、した。いや……。真実に目を向けようとしていた。……が、好きという感情に邪魔され、目を向けられないでいた。彼への、情に溺れ、周りを、見失っていた。あのまま、自分が、死んでいたら、夫は、馬鹿な事をしないで、すんだのではないか……。嶺への、思いを、胸に、死んでしまうのも、良かったのかもしれない……。でも。莉音の、瞳の奥で、桜が。満開の桜が、横に流れていく……。もう、一度、逢いたいと、誰かが、呼んでいた。声が聞きたいと言っていた。桜が、何度も、咲いては、散り、流れていく中で、懐かしい声が、叫んでいた。

「莉音……。戻れ！」

「誰？」

目を凝らしてみても、誰も、居ない。それでも、心は、叫ぶ。

……。逢いたい……。

そう、嶺に逢いたい。

莉音に、逢いたい。

お互い、逢いたかったのでは、ないか……。もう、一度、逢いたいと、そう思つて、戻ってきたのでは、ないか。この恋で、誰かが、血を流そうと、もう、止められないのでは、ないか……。もし、傷つく人が、いるのなら、尚更、成就させなければ、ならないのでは、ないか……。莉音。この、戻ってきた命。嶺に捧げるべきだ……。莉音の心の中で、黒い感情が、頭を、もたげ始めていた。

彼を託します。

「もう、落ち着いたかしら？」

突然、莉音の、前に現れたのは、幾分か、お腹のふつくらとした、美央。その人だった。

「初めまして……。なのかな？」

美央は、莉音に、微笑んで見せた。体調も整い、あの後、しばらくすると、すぐ、退院できた。嶺が、迎えに、来ると、いうのを、断り、美央は、真っ直ぐ、莉音の所に来ていた。今日しかない。嶺が、美央の、行動を、予想できないのは、今日だけだ。何としても、莉音に逢いたい。逢って、話がしたかった。嶺の心を、捕らえて離さない、この女性の事を、知りたい。見たかった。今まで、何度、夢の中であっただろう。どんな顔をし、そんな声で、話……。その唇は、嶺を、受け入れたのだろうか。その細い体は、嶺に抱きしめられたのだろうか……。莉音に逢い、確認したかった。

「あなたは……。？」

莉音は、最初、不思議そうな顔で、美央を、見ていたが、すぐ、美央が、誰かは、悟ったようだった。

「もしかして……。」

莉音の、視線が、ゆっくりと、美央のお腹へと、下りていった。

「お腹が……。」

「そうなの。」

美央は、自慢げに、お腹を、撫でていた。

「大好きな人の子なんです」

「嶺の？」

莉音の顔が、こわばった。

「そうなんです。」

莉音は、もしかしたら、事故の影響で、子供が、できないかもしれない。という事は、面会に来た母親から、涙ながらに聞かせられて

いた。

「美央さん。なのね」

莉音の、心は、勿論、穏やかでは、なかった。

「お腹の子は、確かに、嶺に子です。でも……。」

美央は、こわばった顔の、莉音に続けた。

「莉音さん。でもね。」

美央の、目は、真っ直ぐに、莉音を、みつめていた。莉音の、落胆ぶりが、辛い程、わかる。かと言って、莉音に、勝ったとか、そんなつまらない感情は、なかった。子供を、持てた幸せは、たしかにある。

嶺を、誰か、知らない女から、繋ぎとめる為の、計画だったが、事故の時の、嶺の、落胆ぶりを、みて、思いしった、自分へは、戻らない莉音への嶺の、気持ち。諦めていたが、もう一度、嶺と、やり直したいとも思った、倒れた時に、感じた嶺の、腕の温かさ……。傍に、いても、嶺の心が、戻らなければ、意味がない。このまま、嶺と一緒になれないとしても、莉音の気持ちを、確認しておきたかった。

「嶺と結婚しないかもしれない。」

ああ……。やっぱり。あの別れの、原因は、彼女だったのか。嶺は、子供が出来てしまい、自分と別れた。もともと、一緒になんて、なれる筈が、ないのだ。自分は、夫。そう、家庭のある人妻。自分のしている事は、世間でいう、浮気。もとい、不倫なのだ。どんなに、嶺に、愛していると囁かれようと、甘い思い出があろうと、嶺を責める事は、出来ない。気持ちの裏切りが、あったとしても、嶺は、元々、自分とは、違う世界の人間だったのだから。この美央って、人は、自分と違って、嶺を愛し、愛される資格がある。なんて、羨ましい事が……。でも、結婚しないなんて。

「どうして？」

莉音の声は、かすれた。

「嶺が、思っているのが、あなただから。」

美央は、自分で言っで、哀しかった。お腹の子は、判るのか、お腹が、キュウーと苦しくなった。

「最初は、それでも、良いと思ったの。一緒に居てさえくれれば・・・でもね。」

嶺に愛される莉音が、うらやましい。

「心が、あなたの所にいつてるの。それを、感じてると・・・。哀しいの」

「それは・・・。」

莉音は、なんて、言っでいいか判らなかった。どんな事をしても、嶺が、欲しいと思っただばかりなのに。

「あなたの気持ち、知りたい。嶺の気持ち、戻らないなら、この子と二人だけで、暮らしたいの。ただ生まれてくる子供に、父親が、居ないのは、可愛そうなので、その時だけ、嶺を貸して欲しい。」

「そんな・・・。」

莉音は絶句した。普通は、どんな事をしても、別れてくれって、言う筈なのに、美央は、莉音に、嶺を、貸して欲しいと、言っで来ている。自分を、立ててくれている。

「美央さんでしたっけ？」

莉音は、視線を落とした。

「いいんです。私、夫が、家で、待つてくれるんです。もう、終わらなきゃ、いけない。彼に。」

何故か、涙が出そうになる。でも、こらえなきゃ・・・。

「伝えます。彼と、結婚してください。お幸せに・・・。」

莉音は、堪えた。自分でも、いい笑顔だったと思う。感情を高ぶらせる事もなかったし・・・。美央に、優しく言えた。美央は、驚いた表情だったが、安心した表情を見せた。

「ありがとう」

笑っしかなかった。

「ありがとう」

もう、一度言うと、美央は、席をたった。綺麗な、女性だと、思った。自分と、同じラインに、この人は、立っていた。もう、女性として、比べられるなんて、たくさんだ……。莉音は、小さく笑った。もう、女として、比べられなくて済む。

「楽になれる……」

莉音は、ベッドに、ゆっくり、横になった。

さよなら。

嶺が、それを、知ったのは、間もなくだった。よく晴れた日の午後だった。嶺あり、莉音の好きな白いミニ薔薇とかすみ草を、腕いっぱい抱え、莉音の部屋と向かった。

・・・もう、少しで、退院できる・・・。

そう、聞いていた。なかなか、逢いに来るタイミングが、なく、莉音に逢えずにいた。メールも当然通じない。ようやく、時間を作つて、逢いに向かっていた。

「あれっ・・・」

廊下で、看護師とすれちがった。

「英さんなら、もう、退院しましたよ。」

「えっ！」

嶺は、立ち止まった。

「何度も、先生が、お引止めしたんですけど、どうしてもって。」

「いつですか。」

「そうねえ。一昨日だったかしら。」

あわてて、嶺は、莉音のいた病室へと、駆けていった。ミニ薔薇が、腕から、こぼれ落ちていく。廊下には、無残にも、いくつもの、カスミ草が、落ちていった。

「ない。」

莉音は、いなかった。誰もいない部屋は、以外と広く、ガランとしていた。糊のきいたシャツが、真新しく、白くまぶしかった。

「どうして・・・。」

聞いてない。何一つ。居なくなるなんて、一言も。これからだったんじゃないのか・・・。自分と、少しだけでも、一緒に居たいって、言っていたのではないか。こんな簡単に、自分だけ、納得して、終止符を、打つなんて・・・。

嶺は、あわてて、病院から出ると、莉音の携帯にかけた。コール音

は、するも、何度かけても、出なかった。もしかしたら……。と思いい、メールを送ってみたが、すぐ、宛先不明で、戻ってきてしまった。

莉音は、自分から、去ろうとしている……。諦めが、悪いと思いつつ、嶺は、会社の、莉音の上司に、電話してみた。

「田舎に、戻るとかで……。退職願いが送られてきたよ。」
上司も、驚きを隠せないようだった。

「ところで……。」

話し、続けようとする上司の言葉を遮り、嶺は、電話を切った。せっかく、取り戻した莉音は、自分から、離れて行ってしまった……。事故の時とは、違う絶望が、嶺を、襲っていた。

「莉音」

脱力する嶺の、携帯がなった。

「はい。」

あわてて、出ると。美央だった。

「嶺？これから、そちらに、行こうと思っているんだけど。」

「ああ……。」

嶺の声が、沈んでいた。

「何か、あったの？」

嶺の、落胆ぶりに、美央は、気付いた。

「嶺？」

伺うような美央の声に、嶺は、思わず……。

「莉音が、いなくなつた。」

震える声で、告げた。

「莉音さんが？」

美央も、驚いた。この間の事は、まだ、嶺に言っていない。どうしようか……。しばらくの沈黙の後、美央は、嶺に、告げる事にした。
「ごめんなさい」

美央は、最初、誤った。

「言っていない事があるの。」

美央は、嶺が、怒るのでは、ないかと心配しながら、この間、莉音に逢いに行った事。二人の間で、話した事。莉音が、別れると、告げた事を、嶺に告げた。自分の、感情をコントロールできただけでも、凄いと、心の中で、思いながら。

「別れるって、言ったのか？」

自分には、何一つ、言っていない。

「言えなかったんじゃないかな」

美央は、言った。どうして、ここで、自分が、嶺への莉音の気持ち伝えなきゃならないんだろうと、思いながら。

「莉音さんは、嶺。あなたの事を、本当に、あなたの事を、思っているのね。」

深いため息が、出て行った。莉音には、かなわない。しっかり、嶺の心を、捕らえてしまっている。

「嶺。行って、いいのよ。莉音さんに、あいにく。」

美央は、嶺に言った。

「ご主人とも、別れるって、言ってた。あなたに、それを、告げたら、もう、私の元には、戻らないって、思ってたけど。いいの。行ってあげて。」

涙声になっていた。

「莉音さんの、所に。」

「だめなんだ。」

嶺は言った。

「行けない。」

「どうして・・・。」

「莉音が、俺を受け付けなくなってるんだ」
細く、哀しい嶺の声だった。

2人は、すれ違ふ。

「急に、帰ってきたと思ったら……。お姉ちゃん。少しは、元気でしたの？」

莉音は、妹の、家に居た。

「事故の時も、行けなくて。ごめんね。子供を見てくれる人もいなくて」

莉音のあしもとで、まだ、6ヶ月にも、満たない幼子が、遊んでいた。

「うん。いいの。」

「こんな時、親が、居てくれたらって、思っただけど。」
妹の、来夏は、幼子を、抱き上げた。

「お姉ちゃん。離婚するの？何回も、義兄さんから、電話があつた。離婚届けに、サインしたまま、いなくなつたって。」

「うん」

「また。生返事……。ちゃんと、話しあつた方が、いいんじゃないの？電話にも、出ないんじゃないし、具合だって、よくないんでしょ？」

莉音が、突然、夜中に、尋ねて来た時は、驚いた。事故で、重症を負い、入院したと聞いて、病院に、何度か、行こうとしていたが、幼稚園の子供と幼子を抱え、単身赴任の夫を抱えた来夏には、身動きとれないで、いた。早くに、両親をなくし、頼れるのは、互いの姉妹だけだったが、実際の所、なかなか、会えずに居た。だからこそ、何かあつたら、力になりたいと、思っていたのだが、突然、現れた莉音は、あまり、語らず、夫からの、電話で、無理に退院した事。離婚しようとして出てきたこと。そして、その原因が、莉音の夫が、何か、事件を起した引き金になった事に、結びついた事であると、気付けられていた。

「病院。無理に退院してきたんでしょ？」

「・・・」

莉音は、ずっと、上の空だった。早く、嶺の前から、姿を消したい
と思い。行動にでた。もう、傷付きたくなかった。嶺の事を、愛せ
ば愛する程、傷が、深くなる。よく切れる刃物を、素手で、掴んで
いるような危ない恋。全て、忘れてしまおう。そうすれば、楽にな
れる。嶺の事も。夫の事も。今更、やり直しても、お互い、過去に
縛られ、傷つくだけ。全て、ゼロにして、新しく、生きていこう。
そう決めたのに、心の奥に、染みついている記憶。

・・・もう少しだけ・・・

いつも、そう思っていた。もう、少しだけ。一緒に居る時間を、貪
っていたあの日々。嶺を、忘れなきゃ。そう、思えば、思うほど、
忘れられなくなる。いつその事、憎んでしまえば、楽になれるのに、
思い出すのは、明らかに、自分を、愛してくれた嶺の、輝いた目だ
った。嶺と、一緒にいた美央。美央の事も、最初は、憎んだ。でも、
ルールを、破ったのは、自分。自分が、嶺と、結ばなければ、一
緒にいるのは、美央に決まっていた。でも、恋愛。人を好きになる
のに、ルールなんて、あるのだろうか・・・。

いや・・・。だめだ。美央のお腹には、嶺の子供が、いる。その子
供を、悲しませる事が、出来るのだろうか。どんな形であれ、子供
を巻き込んで、いけない。親のいない悲しみは、自分達姉妹が、
一番よく知っている筈では、ないか。

「聞いている？」

来夏だったあまり、莉音の顔色も、良くなり、食欲も落ち、痩せて
いく、姉を心配すると、どうしても、口やかましく、なってしまう。
「病院行つてね。ほんと、お姉ちゃん。無謀なんだから」

いつそ、莉音の、夫に、お願いしようかと、思っていたが、止めと
いた。姉が、離婚したいのには、最もな、理由があるのだろう。ど
うみても、姉には、思っている人が、いる。何度も、鳴る携帯には、
出ようとせず、かといいて、着信拒否する訳でなく、時折、携帯の
着信履歴を、見ている様子から、みて、誰かを、待っているように

も、見える。だが、連絡できない人なのだ。遠くから、来夏は、姉の、苦しんでる様子が、見えていた。

「ごめんね。少しは、貯金があるから。仕事が、見つかるまで、置いてほしいの。そしたら、出て行くから」

「何、言ってるの。うちは、旦那が居ない分、お姉ちゃんが居てくれると、助かるから。お姉ちゃん。あと少しすると、幼稚園バスきるから、外の空気吸いがてら、お迎えに行ってくれる。階下だから、病み上がりでも、大丈夫でしょ？階段にでも、座って、日向ぼっこしてなよ」

来夏は、少しでも、気分転換できるよう、薦めた。

「そうね。そうする」

莉音は、立ち上がった。

「行ってくる」

「お願いね」

来夏は、莉音を、外へと促した。

季節は、もうそこに、夏が迫っていた。青く、広がる空に、日差しが強い。美央のお腹も、次第に目立っていた。

「約束よ。」

美央が言った。

「私だけを見て」

婚姻届に、サインをした。2人だけの、小さな式だった。街はずれの、小高い丘にある教会。学生時代に、よく2人で、デートに来て、帰りに、アイスを食べた。美央にとっての、思い出の地。美央は、シンプルなドレスを着ていた。細い首に、飾りの花が揺れていた。

「判ってるよ。」

「愛してる？」

「・・・うん・・・」

「ちゃんと、言って」

「・・・あい・・・」

「？」

美央が、せがむ目をした。

「してる」

嶺の、タキシード姿に、訪れている女性達から、歓喜の声があがった。シルバーのタキシード姿が、よく似合う。俳優の誰かに、似てると、女の子達が、口にしていた。

「幸せになろう。」

美央は、嶺の手を強く、握り締めた。

繋がる思い。

嶺は、何もしなかった訳では、ない。携帯も、通じない中、とにかく、莉音を探した。莉音の、実家を、会社の書類で、調べ上げ、直接、尋ねてみたが、両親は、とうに、亡くなっているとかで、家は、荒れたままに、なっていた。思い切って、莉音の、夫を、尋ねようかと、思ったが、それは、案の定、難しく、人つてに、莉音が、離婚したと、聞いただけだった。莉音が、離婚したと聞いた時、心が、震えた。もしかしたら・・・と、いう思いもあったが、美央の、お腹だけは、待ってくれなかった。月が、満ちてきてる。ようやく、自分達は、一緒になれるかもしれない。と、いう思いとは、裏腹に、嶺は、美央と、結婚する日が、近づいていた。

・・・もう、これ以上、待たせる訳には、いくまい・・・

莉音は、もう、自分の力では、探し出せなくなっている。

・・・美央の子を引き受けよう・・・

嶺は、美央の、思いを、受け止める事にした。莉音への、思いを、心の奥に沈めよう。いつか、古い傷のように、疼くかもしれない。あんなに、恋焦がれた人だもの、忘れられる訳が、ない。

自分は、莉音を、生涯忘れる事あり、ないだろう。いや、まだ、諦めた訳では、ない。逢えば、時間は、逆戻り、莉音を求め、一緒にいたいと思うだろう。逢えなくとも、心の、奥底に、莉音への、熱い思いが、染み付いていた。きっと、生まれてくる子供を、愛する事は、出来るだろう。でも、莉音より、深く、美央の事を、愛する事は、生涯できない。

「子供を、幸せにしような。」

嶺は、美央に、笑いかけた。

夏が、そこに、迫っていた。家を出、一人暮らししようと、する莉

音を、妹の来夏は、自分の子供の子守を、理由に引き止めていた。

日に日に、姉の、莉音は、痩せていき、憔悴しきっているのが、わかっていった。理由も、何かは、わかっていった。それを、余計なお節介とばかり、手出していいのか、わからなかった。近くの、雑貨屋に、働きに、行くようになって、少しは、表情も、戻ってきたが、相変わらず、通院は、続いていた。

「今日も、仕事なの？」

元氣のない姉を、誘って、近くの公園で、開催されているフリマに行こうとしていた来夏は、不満の声を上げた。

「ごめん。休みの予定だったんだけど。急に、出てくられて、言われて・・・。」

「なんだ。仕方がないなー」

来夏は、お弁当を、莉音に渡した。

「しかり、食べてね。お姉ちゃん。そんなに、痩せて、見た目、悪いよ」

「そお？じゃ。時間だから」

莉音は、お弁当を受け取ると、あわてて、外へ、飛び出していった。「あつ！おねえちゃん」

携帯忘れてるよ！言おうとしたが、はっと、思い当たり、追いかけるのを、やめた。携帯を、手にとって見た。何度も、着信が入っていても、出なかった。莉音の携帯。着信拒否でもなく、番号を変えるわけでもなく、鳴るままに、させておく、携帯。来夏は、携帯を開いた。オートロックされている訳でも、なく、すぐ、画面が、見えた、着信履歴を、見ると、同じ名前での、着信が、ずーっと、続いていた。

・・・嶺・・・

最近、何日かに、1度の割合のようだが、何日も、前は、日に何度も、かかってきていた。

・・・ああ・・・この人だ・・・

来夏は、嶺の、番号を、自分の携帯に、控えると、発信した。後で、

履歴は、消すつもりで。

再び、逢おう。

美央は、幸せだった。ようやく、手に入れた嶺との、生活。引越しも、業者に頼んだから、楽だったし、片付けも、嶺が、まめに手伝ってくれたから、何とか、形になってきた。式も、終え、新婚旅行とやらは、子供が、生まれてから、落ち着いてからと、いう事になり、国内の2泊の、旅行で、すませた。今まで、考えられなかった嶺との、望んだ幸せであった。嶺の、朝食を、用意するのも、妊娠中の、辛い体では、あったが、大好きな人との、望んだ暮らしなので、がんばって、用意し、嶺を、送りだした。嶺も、美央の、作る朝食を、美味しいと言って、食べ、仕事へと、向かっていた。

そう、この日。来夏からの、電話が、嶺にくるまで、嶺と、美央は、普通の夫婦と、何一つかわらなかった。

突然、嶺の携帯が、鳴ったのは、会社に着いて、間もない時間だった。着信名を、見て、嶺は、我が目を、疑った。

「莉音？」

心臓が、高鳴った。忘れもしない人の名前。どんなに、忘れようとしても、忘れた事のない人への、思いが、胸の奥から、湧き上がった。手が、震え、危うく、携帯を落としそうになった。

「莉音。」

・・・だが、携帯から、聞こえてきた声は、莉音に、似てこそ、いたが、全く、知らない女の声だった。

「嶺さん？」

「はい・・・。」

「私、莉音の、妹、来夏です。」

「妹さん？」

莉音に、妹が、いるのは、初めて聞いた。嶺は、今まで、自分が、どんなに、莉音を、探し続けていたかを、話、今、何処にいるのかを、聞いた。来夏も、莉音の、今までに至る経緯を話し、今の莉

音の、状況を、説明した。助けて欲しいと。

「このままじゃ、姉が、可哀想なんです」

来夏は、告げた。

「あなたに、逢いたいのを。無理して、抑えてるんです。姉に逢って、ください」

「俺も。同じ思いです。」

振り絞る嶺の声だった。

「一目、逢いたって、思っていました。」

何を、おいても、莉音に逢いたい。どうして、居なくなったのか。自分と連絡をとらなくなったのは、何故なのか、聞きたかった。想像はつく。だが、言葉で、しっかり、聞きたい。

「今の住所を、教えてください。」

嶺は、来夏の、住所を聞くと、ここに、電話した事を、口止めし、すぐ、莉音の、いる街に向かう事にした。今すぐ、有給をとり、彼女のいるに、向かう事のだ。

そして、君と。

来夏の家、戻るには、長い坂を、上りきって、細い路地裏に入らなければ、ならない。夕焼けが、綺麗だった。たくさん、お店の、パンを、お土産に、もらった。

「今日は、無理に出てもらったから、早めに、あがつて」

思いがけず、早く、帰れる事になった。早く、帰れたから、焼肉でも、食べに行こうかと、電話しようとして、携帯を、忘れた事に、気づいた。帰ってから、出掛けても、いいと思い、来夏の子供達の為に、お店の、格安パンを、買いこんでしまった。子供達は、パン好きだ。ついでに、自分の好きなイチゴジャムや果物のシロップ漬けも、買った。

もう、すぐ、陽が暮れる。以前、余りにも、夕陽が、綺麗だったの、で、嶺に、写メを、送った事が、あった。

・・・嶺・・・

忘れようと、しても、心の、奥底に、住んでいる人。忘れようと、すれば、するほど、彼の色が、濃く残っていく。

・・・逢いたい・・・

正直に、言えば、嶺に逢いたい。当てしまえば、余計に辛くなるし、今までの、忘れようとした努力が、無駄になると、自分に、言い聞かせ、ここまでできた。一緒に、住める世界の、人で、ないと、何度も、自分に言い聞かせた。・・・けど、心が、彼を、求めている。

・・・無理なのに・・・

莉音は、ため息をついた。

・・・と。

手が、滑り、別に、持っていたシロップ漬けが、転がり落ちた。

・・・あぁっ！・・・

拾おうとして、地面に、つまずき、思わず、転倒してしまった。

・・・まったく・・・

そそっかしい。よく、嶺に、笑われたっけ。莉音は、一人、失笑した。

「相変わらず、だよね？」

目の前に、手が差し出され、体が、浮いた。聞き覚えのある声。顔。そして、匂い。

「嶺」

反射的に、嶺から、逃げようとした。

「だめだよ！嶺」

いけない。この人には、あの人が、いる。若く、綺麗な、あの人が。ダメなのは、莉音だよ」

嶺は、逃げようとする莉音を、後ろから、抱きしめた。

「もう、居なくならないで」

力強い嶺の、腕の力だった。忘れようとしても、忘れる事は、出来なかった。何度、抱きしめて欲しいと、願った事が……。肩の、力が抜け、自然に、嶺の、唇を、求めていた。

離さない、嶺の腕。

もう、とまらなかった。時間が、さかのぼり、あの頃へと、戻っていた。何度、思い描いただろうか……。何度、この腕を、想像し、この髪の毛、匂いを、思い出したことだろう。逢いたくても、逢えない。その辛さに、お互い、涙した。やっと、逢えた。そう、思った時、二人は、とまらなかった。今までの分、互いを、求め合う気持ち、同じだった。嶺と、莉音の間に、もう、何も、邪魔するのは、なく感じられた。二人は、何度も、唇を、求め合った。

「嶺」

莉音は、どうして？と、聞きたかったが、嶺に強く抱きしめられ、言葉が、出なかった。

「もう、居なくなるなよ……」

嶺が、泣き出しそうだった。

「探したんだ。ずっと。ずっと、探し続けるつもりだった。生きていてくれれば、それでいいと、思った。だけど、逢えないのは、辛い」

本当にやっと、逢えたんだ。そう、思うと、腕の力が、強くなる。

「もう、一緒にいたい」

嶺の、気持ち。

「嶺。嬉しい。けど。」

莉音は、嶺の、胸を、そっと、押した。

「その為に、泣かせる人が、いちや、いけないよ」

美央の、事だ。莉音は、美央が、嶺の子供を、妊娠している事を、知っている。辛くても、生まれてくる子供から、父親を、奪うわけには、いかない。哀しい決断をし、嶺の、前から、姿を、けしたのだ。

「知ってるの。」

「美央から、聞いた」

嶺は、美央から、莉音が、姿を、消す前に、あつたやり取りを聞いた事を、告げた。

「俺の、子供の事なんだよね？」

莉音は、嶺の、目を、見つめると、うるんだ瞳で、頷いた。

「子供から、あなたを、奪う事は、出来ないから……。」

嶺の、そばに、行きたい。夫と、別れた今なら、それが出来る。でも、生まれてくる子供に、いったいどんな罪が、あるというのだろう……。嶺なら、きつと、いい父親になれる。自分は、その傍らに、いる事は、出来ないけど、遠くからでも、嶺の、良き父親の、姿を、見る事は、出来るだろう。報われなくても、いい。そおいう愛し方が、あつても、いいはずだ。

「……だから。嶺。ここで、お別れしましょう。逢えて、嬉しかった。あたし達、もう、昔とは、違うの」

莉音は、落としてしまった荷物を、広い集めた。

「やっぱり、だめよ。余りにも、周りを、傷つけすぎたわ……。あたしが、悪いんだけど」

精一杯、嶺に、笑顔を、作った。

「今なら、引き返せる。嶺。これ以上、周りを傷つけるのも、あたし達自身を、傷つけるのも、辞めよう。もう、連絡とるのも、やめましょう」

「できない」

「嶺！」

「美央を、愛する事は、できない……。だめなんだ。莉音」

嶺は、去ろうとする、莉音を、引き止めた。

「一番、傷ついてるのは、莉音。君じゃないか。もう、これ以上、傷つけない。俺と一緒に、帰って、欲しい。」

「そんな簡単な事じゃ。ないでしょう？」

莉音は、泣いていた。本当は、嶺に、ついていきたい。でも、それは、もう、一人の、女を、不幸にする。

「あなたは、わからないの？」

「わからない。判りたくないんだ。俺のわがままなんだ。でも、この我儘を、通して、ほしい。莉音。」

「通せない！」

嘘だ。莉音は、自分で、いいながら、思った。自分は、嶺に、強く受け止めて欲しいと思っている。でも、本当の、事は、言えない。

「莉音。一緒に、帰ろう。」

嶺は、莉音の、腕を、強くつかむと、歩き出した。

「帰るんだよ。莉音。俺の所へ」

嶺の、力は、強かった。迷いもなく、莉音の、手をひいていた。離して！と、莉音は、言いたかったが、いつにない、嶺の力強さに、戸惑いながら、莉音は、ついていった。嶺が、タクシーを、拾うべく、足取りは、強かった。

美央。愛せない。

「それでさ。落ち着いたの？」

優しい声だった。体を、心配し、メールだけでなく、何度も、電話を、くれる。

「うん。大丈夫。いつも、ありがとう。」

彼は、優しい。限りなく。不安な時、いつも、癒してくれるのは、拓斗だった。美央の、体を心配し、いつからか、定期的。いや・・・。一日に、何度も、連絡を、くれるようになっていた。あの時、拓斗の、告白を、受け入れ、付き合っていたら、幸せになれただろうか・・・。いや、自分が、愛さなければ、意味は、ない。自分が、拓斗を、愛していたら。・・・と、いう事になる。彼と、一緒にいたら、幸せで、平凡な、生活が、出来たかもしれない。

「何か、あったら、いつでも、連絡しれくれよ」

拓斗は、そう言つと、電話を切った。

「そうね・・・。」

何も、無い方がいい。余りにも、いろいろありすぎた・・・。嶺と、静かに暮らし、お腹の子を、育てたい。普通に、優しく、微笑んでくれる嶺が、傍にいれくれれば、何も、いらぬ。再び、携帯が、なった。

「はい？」

嶺から、だった。

「美央？話したい事が、あるんだ」

「話？帰ってきてからでも、いいのよ。今日は、遅いの？」

「いや・・・。帰ってからでは、遅いんだ。」

嫌な予感がした。

「やつぱり。俺達。きちんと話す事が、必要だと思つ」

「俺達？」

それは、自分と、嶺だけでは、ない気がした。

「莉音を、みつけた」

「！」

美央は、めまいを、覚えた。携帯を持つ手が、震えた。

「一緒なの？」

「一緒にいる」

「そう・・・。」

美央は、携帯を、みつめた。沈黙だけが、続いた。

「美央。俺。自分の、気持ちに、正直になりたい。子供を、産んで、欲しいと思っている。だけど・・・」

「だめ。そこから先は、言わないで！」

「美央。言わせて欲しい。きっと、君だって、俺と一緒にいるのが、辛くなる時が、来ると思う」

「俺だって、君と、何を話したら、いいかわからない日を、続けるのは、辛い。美央は、言ったよね？心が、ないのに、傍に居られても、辛いだけだって。美央。君を、愛し、幸せにできる男は、俺じゃないんだ。」

「違う」

美央は、叫んだ。嶺の隣。電話の、向こうでも、言い争う声が、聞こえた。

「そこに、いるんでしょう？莉音さんを、だして！」

「だめだよ。美央。莉音は、自分は、また、どこかへ、行くつもりなんだ」

「嶺」

あたしと、莉音さんと、どちらが大切なの？と、言いたかったが、答えは、判っていたので、言えなかった。嶺が、愛しているのは、莉音なのだ。自分を、愛してくれた嶺は、過去の、嶺なのだ。今、ここで、話している男は、自分が、恋焦がれた男では、ない。美央は、ようやく真実に、気づいた。

「ひどいよ・・・。どうして、こんな事を・・・。」

激しく、嗚咽がこみ上げてきた。携帯を、放り投げ、その場に、座

り込んだ。どうして、こんな酷い目に、自分を、あわせるのだ。嶺に、対する怒り、悲しみが、こみ上げてくる。
「嶺のばか」

美央は、裸足のまま、家を、飛び出していた。

運命は、からまる糸と。

「どうして……。嶺。それは、ひどすぎる」

莉音までもが、涙目になって、携帯で、話終える嶺に、詰め寄った。人は、どうして、本当の、愛を追求しようとする、周りを傷つける事になるんだろうか。嶺の、自分への、気持ちは、物凄く、嬉しい。だけど、今の、美央の体の事や、嶺から受けた言葉を、考えると、自分の事のように、辛かった。恋しくても、手に入らない辛さは、自分も、よく知っている。好きだからこそ、最後の心の力を、振り絞って、別れたのだ。美央を、傷つける気持ちなんて、毛頭もない。

「美央さんと争う気はないの。もう、静かに、暮らしたかったの。嶺。あたしは、もう、いいの」

車を、停めてほしい。自分を、帰してほしいと、何度も莉音は、嶺に告げたが、嶺は、莉音に、切ない顔をするだけで、車を、停めてくれる事は、なかった。

「莉音。俺が悪いんだ。君への最初の、思いを貫けばよかった。迷いがあつたんだ。迷っている間に、傷が、どんどん深くなる。莉音。運命って、あると思う。俺は、莉音と添いたいと、思っている。その気持ちを、貫くのも、今まで、傷つけた人に、報いるためだよ」

「莉音。もう、二人だけの問題じゃないんだ。一緒に、生きて行きたい。しっかりと、三人で、話し合おう」

嶺は、莉音を、抱きしめた。

「もう、だめなんだ。また、居なくなるんじゃないかと思って……。不安で。不安で。この気持ちのまま、生きて行く事は、出来ない。」

莉音の手が、嶺の腕に、触れた。

「約束どうり、秋花火の頃には、一緒にいよう。もう、少しだよ。」

。莉音。俺は、一緒にいるだけで、いいんだ・・・。」

莉音は、答える代わりに、嶺の、肩に、そっと、頭を、のせた。

「だから・・・。莉音。美央を、幸せにする為にも、このままじゃ、ダメなんだ。判ってくれるね？」

「嶺。私・・・。美央さんを傷つけない」

「俺も、同じだよ」

車は、橋を、渡り切ろうとしていた。水面に、街の、イルミネーションが、反射して、綺麗だった。

いつの間にか、美央は、拓斗の、マンションの前にいた。もう、夜遅く、近くの公園で、遊ぶ子供達の声もない。12階建ての、マンションは、闇夜に、つめたく、白く反射して見えた。

「体、冷えてるよ・・・。」

拓斗は、エントランスから、出てくると、奥さんの物らしき、カーディガンを、美央に、はおらせた。突然訪れ、インターホン越しに、聞いた拓斗の声は、どんなに、驚くかと、思ったが、意外に、冷静で、むしろ、美央が、訪れた事を、喜んでるようにも、みえた。

「ごめんなさい。突然。奥様に、迷惑よね？」

「うちのやつ。今、実家なんだ。」

拓斗は、笑いかけた。

「何が、あったかは、聞かないけど・・・。あまり、いい話じゃ、なさそうだな」

拓斗は、美央が、裸足で、薄着しているのを、みながら言った。

「とにかく、妊婦さんには、早く、中に、入ってもらおうかな」

美央の、背中を、そっと、押しながら、言った。

「結局、嶺じゃ。だめなんだよ。美央」

美央は、俯いた。

「どんなに、好き合った時が、あったとしても、その時期が、過ぎてしまうと、もう、戻れないんだ。この、運命だけは、変えられない

い。嶺は、だめだよ」

声を、押し殺して、泣いているのが、判った。

「俺もさ……。嶺を、何度も、説得したの。だけど。こおいう事なんだ。」

エレベーターの、スイッチを押し、美央の、肩を、抱いた。

「俺も、昔。見ていた事が、あつただけどね」

深いため息が、拓斗から漏れた。

「俺なら、幸せに、する自身があつただけど……。」

小さく拓斗は、呟いた。美央に、聞かれないように。

美央への思い。

「いない。」

嶺が、マンションに着いて、ドアを開けるなり、呟いた。玄関で、美央の、履物を、調べると、履いていたらしき靴は、見当つかず、どうやら、裸足で、飛び出していったらしい。

「これ・・・」

部屋の、奥から、美央の物らしき携帯を、莉音が、見つけた。

「嶺。だから、言ったの。美央さん。赤ちゃんが、いるのよ。」

莉音は、もう、泣きそうになっていた。

「こんなの。嫌よ。嶺。もう、辛い思いするのも、させるのも、嫌なの」

何よりも、辛いのは、二人の生活の、痕跡を、ここで、目にするのが、辛かった。色の無かった部屋は、明るい色どりで、統一されていた。グレーの、タペストリーは、クリーム色のカーテンが、二重になり、グリーンで、縁取りされていた。キッチンなは、食器が、二つずつ並び、ハブラシも、2本あった。

何より、ショックだったのは、ベッドに、枕が、二つ並んでいた事だった。見ないふりを、してみたが、ここには、美央と嶺の、生活の、匂いがあった。

「何より、美央さんが、心配だわ。嶺。心あたりは、ないの？」

嶺は、黙って、キッチンに立ち、コーヒーを、入れ始めていた。そんな嶺の態度に、イラっとしながら、莉音は、詰め寄った。

「嶺？」

「あるよ・・・」

カップに注いだコーヒーを、莉音に差し出した。

「それは、言っていない事がどうか、俺は、判らないんだけど」

コーヒーを、一口、すすった。

「どおいう事なの？」

「美央の、俺に対する思いは、今、進行している思いなんかじゃないんだ。きっと。あいつが、好きなのは、昔の、俺なんだと、思う・・。」

深くため息を、つき、遠く、思いを馳せた顔をした。

「ただ・・。俺に、対する執着なんだと思う。あいつは、そんなに、俺を、思っちゃんない。」

莉音を、真っ直ぐに、みつめた。

「変ったんだ・・。きっと。莉音に、あつて・・。それに・・。」

嶺は、言うかどうか、迷っているようだ。

「なあに？嶺。」

莉音は、嶺の口元を、見つめた。

「うん・・。まだ、はっきりは、言えない。あくまでも、推測だから。」

嶺は、カップを、置くと、莉音の細い腰を、抱きしめた。

「俺は、君を、裏切つてはいない。」

いつの間に、こんなに、莉音は、痩せてしまったんだろう・・。

嶺は、思った。こんなに、自分が、知らない間に、痩せてしまった。

莉音を、苦しめる立場に、追いやった自分の、非力さをのろった。

「美央は、妊娠する事で、俺を繋ぎとめると、思っただろうか・・

・。」

「！」

莉音は、体を硬くした。

「それは・・。嶺」

「俺の子では、ないと思うんだ。」

莉音は、顔を上げると、そこには、無表情の、嶺の顔があった。

「そこまでして？」

怒りと悲しみが、込み上げてくるのを、莉音は、感じた。

「そうなんだ。そこまでして・・。あいつは。」

「嶺。じゃあ、今、美央さんがいるのは。」

「・・。そこ。かもしれない。」

嶺は、美央の、行き先を、知っているの、探そうとしていないように、みえた。

「まさか。そんな事……。お願い。それは、あくまでも、推測でしょ？とにかく、探しましょう。」

莉音が、玄関に、向かおうとすると、嶺が、莉音の、腕を、後ろから、つかんだ。

「いいんだよ。」

嶺の携帯が、着信を、知らせていた。

「ほら……。来た。」

莉音を、見つめながら、嶺は、携帯を、耳にあてていた。

「はい？」

莉音には、みせた事のない。冷たい嶺の、横顔だった。

鍵となる命。

窓の外には、限りなく夜景が広がっていた。色とりどりの夜景。暖かく見える筈の夜景も、今の美央には、どうでも、よかった。

「三人で、話したいって。嶺が、言うの……。」

立って、いられなくなり、美央は、ソファーに、尻餅をつくように、座り込んだ。

「二人を、みるのが、辛いの。」

辛そうに、拓斗を見た。

「嶺や莉音さん。一人だけで、話をする事は、できるけど。二人並んで、話するのは、嫌なの。あの、二人の間に、私は、入れないと思う。」

拓斗は、美央の隣に、当たり前のように、腰かけ、熱いお茶を、渡した。

「わかってているの。嶺が、誰と居たいかは……。」

両手で、顔を覆った。

「でも。どうしたら、いいのか。わからない。嶺を、失ったと思うと、生きていけなくなりそうで……。私のこれからは、嶺と、ずーっと一緒だって、思ってきたから」

嶺の周りを、心配した事もあったけど、信頼していた。仕事も落ち着いたら、きっと、迎えに来てくれると信じ待っていた。

「だけど……。初めて、莉音さんを見た時は、不安で……。もしかしたら、嶺をとられるんじゃないかと……。思っで。やっばり」

こらえきれず、美央は、泣き出した。裸足で、歩いてきた両足が、冷え切っていた。拓斗は、美央の両足を、さすっていたが、たまらず、美央の肩を抱いた。

「だからって、バカな事を……。」

拓斗は、美央の髪を撫でた。

「だから……。俺と一緒になれば、よかったのに……。美央。俺は、君が嶺を、好きだから、諦めたのに……。こんな辛い思いを、させるんだったら……。」

美央は、顔をあげた。

「ごめん。拓斗。」

「君が、幸せになつてないなら……。」

拓斗が、たまらず、唇を重ねようとしたが、美央は、ゆっくり、顔を、はずした。

「ごめん。拓斗。今は、そんな気になれないの。ごめん。」

美央は、ちいさく謝った。

「いいよ……。俺には、十分な絆が、あるから。」

拓斗が、美央のお腹に、触ろうとするのを、美央は、片手で、押し戻した。

「拓斗。駄目。」

「判つてる。」

拓斗は、ため息をついた。

「とにかく、ここに、ずーと、居る訳にも、いかないだろう？俺も、いるから。話しようか？」

「いてくれるの？」

「嶺。あいつが、許せるんなら。それに、いつかは、話さなきゃ。だよな？」

拓斗は、携帯を、棚から、とりだすと、美央に、軽く、うなずき、かけはじめた。

「嶺？俺だけど。話があるんだ」

窓の外には、とおく夜景が、広がっていた。

譲れない思い。

莉音は、落ち着かなかった。できれば、美央に、逢いたくなかった。嶺とは、一緒にいたい。けど、切なく嶺を思う美央の気持ちを、知れば知る程、傍には、居れないと、思えてしまう。どんな手をつかっても、奪えるものなら、奪うのが、愛情なのだろうか？莉音には、できない。そこまで、周りを、巻き込み、傷つけ、炎の激しさで、焼き尽くすように、相手を愛するなんて、そんな愛し方は、莉音には、できない。静かに、嶺の、傍らにいれるだけで、幸せだった時は、過ぎ、嶺の為にも、答えを、出す時期が、迫っていた。自分は・・・どうなんだろう。そこまでして、嶺を、手にいれるべき、なのだろうか。もう、自分の恋愛は、終わりを告げており、その、幻想を追いかけているだけに、過ぎないのでは、ないか。美央の嶺を、追いかける思いに、自分は、かてない。若く、はつらつとし、自身に溢れた、美央の前に立てない。厳しい顔の、嶺の横顔を、みつめながら、莉音は、告げた。

「あたし。やっぱり、帰るわ」

嶺は、莉音を、見返した。

「嶺。いいの。あたしは、あなたを、思うだけで、幸せだから・・・何の、欲もない。静かに、暮らせれば。」

玄関に、行こうとする莉音の、手を、嶺がつかんだ。

「莉音。このままじゃ、前に進めない。終わらないんだ。」

「だけど。」

・・・辛すぎる・・・

「一緒に、なれるの？」

莉音は、嶺の顔を見た。

「引き返せない」

嶺も、莉音の、顔を、見た。

「莉音。嘘は、だめだ。自分の、気持ちに嘘は、つけない・・・」

嶺の、視線を振り払い、外へ、出ようと、戸を開けようとした時、顔を、覗かせる姿が、あった。美央だった。

「美央さん？」

どこからか、借りたのか、スリッパをはき、当たり前のように、玄関の鍵を、シューズロッカーの上に、置くと、美央は、莉音に、微笑みかけた。

「いらつしゃい。」

自分と、嶺の家である事を、さりげなく、アピールしたようだ。美央の後ろには、拓斗の、姿が、みえた。

「嶺。帰ってたの？」

美央は、嶺の首に、抱きつくと

「心配して、拓斗が、来てくれた。」

莉音に、挑発的な、態度をとった。

「拓斗……。」

嶺は、拓斗を、みやった。

「ありがとうな」

とりあえず、礼を言った。

「ここに居ても、何だから……。熱いお茶でも、淹れるわね。」

何事もなかったように、美央は、リビングへ、入るよう、勧めた。

「あたしは……」

莉音は、中に入ろうとしなかった。

「ここで、失礼するから。」

脚が、中へとは、向かなかった。リビングの、向こうに、どこかの、看板が、光っているのが、真っ直ぐみえた。二人は、この夜景を、毎晩みているのだろう。ここには、莉音の、知らない嶺と美央の生活が、ある。窓が、開いているのか、カーテンが、風にゆれ、ベランダが、みえた。たくさんの観葉植物が、ベランダに並べられている。

「ここには、来ちゃいけなかった……。」
声が、震えた。

「帰る」

「莉音！」

嶺は、引きとめようとした。

「嶺！行かないで！」

それを、美央が、引きとめた。

「そんなに！そんなに！莉音さんが、いいなら！」

美央は、ベランダに、飛び出て行った。鉢植えに、乗りあがり、柵を、乗り越えた。白いドレスが、カーテン同様、風にゆれていた。

「美央！」

拓斗も、叫んでいた。

「どうして、判ってくれないの。嶺。一緒に居ても、心が、なきやだめだって、言ったじゃない。必要なの。嶺。こんなに、一緒に行きたいって、思っているのに……。だめなの？」

「嶺……。」

莉音は、首をふった。ここに、自分は、居ちゃいけない。でも、この、光景に、動く事は、出来なかった。

「嶺！美央さんを、止めるのよ！早く！」

莉音は、叫んでいた。

「嶺！」

早くしないと、美央は、本気で、飛び降りる。激しく動悸し、貧血がおきそうになった。興奮したせいだ。そう思った。

「莉音さん？」

一瞬、ベランダの向こうの美央と、目があった。気がした。嶺が、驚いた顔で、自分を、見た。

「莉音！」

嶺の、唇が、そう動いた。それが、莉音の、みえていた記憶だった。胸を、押さえ、莉音は、そのまま、床に、倒れていた。

「莉音！」

嶺は、莉音へ、駆け寄り、拓斗は、美央の、両手を、握り締めた。それぞれが、それぞれに、動いた瞬間だった。莉音の、苦しい呼吸

だけが、続いていた。

君と一緒に。

「今まで、何度も、こんな症状が、あった筈です。」

硬い表情で、嶺は、告げられた。急遽、よびだされた莉音の、妹も、説明に付き添って、いたが、あまりにも、子供達がぐずるので、廊下で待つ事になった。以前の事故の事。妹宅に、身をよせてる時も、あまり病院に、行こうとしなかった事や、時々、具合の悪い事が、あった事を、妹から、聞かされ、ようやく、嶺は、事の、重大さに、気づいた。もう、時間が、そこに、せまっていた。自分が、躊躇していたのが、間違いだった。

「もう、心臓が、持たないかもしれない。」

医師の、説明を聞き終え、面談室から、出てきた嶺は、悲痛な、面持ちで、妹の来夏の、隣に、体を、投げるように、腰かけた。

「移植できれば、希望は、持てるが、秋まで、ドナーが、みつからなければ……。」

こんな事、ある筈が無い。ようやく、莉音と、一緒に生きていこうとしていたのに。これから、二人で、生活していけるとばかり、信じていたのに。今、自分達に、おきている、事実を、受け入れる事が、できないで、いた。莉音の、心臓は、もう限界が来ていた。

「今、莉音が、いなくなるなんて……。信じられない。」

「嶺さん。姉は、あの事故で、助かったのだった、奇跡なんです。今、こうして、生きていられたのだった……。」

「希望が、持てたんだ……。もっと、生きていなきゃ。」

生きなきゃ……。後は、言葉にならなかった。湧き上がる言葉は、反省と、悔しさ。恨めしさ。いろんな感情が、湧き上がるが、嶺は、言葉にする事もできず、黙って、唇を、噛み締めていた。来夏と、肩を並べて、すわる暗い廊下に、子供達の、寝息だけが、聞こえていた。

嶺が、莉音と面会を、許されたのは、それから、1週間ほどしてからで、あった。その間の嶺あり、莉音の病室を、窓の外から、見上げるだけの日々が、続いた。美央は、莉音の事があった日から、実家に戻り、嶺とは、近況報告の電話をするだけで、お互いに、今後について、話す事は、なかった。嶺としても、莉音の件が、あるので、美央と離婚をしたいと、思うのだが、家族の手前、なかなか、話し出せないでいた。美央の口から、本当の事を、言ってくれれば、すぐにでも、離婚の話が、すすむのだが、思うどおりには、いかない。拓斗を、問い詰めようか……。そう思った事もあるが、拓斗の、家庭の事を、考えると、先には、すすめない。思案している内に、美央から、電話があった。

「嶺。聞いたわ。莉音さんの事。」

「直接、会って、話そうと思っていたんだ。君と……。結論を出さなければ、いけないと思ってる。」

「やっぱり……。どうしても、そうなのね？」

「お願いだから……。美央。俺、みつともないかもしれない。だけど。莉音と、本当に、一緒にになりたい。ずっと。一緒にいたかったんだ。」

「あたしに、それを言うの？」

「許してほしい。」

「……。」

美央は、黙った。

「もつと、早く、言えばよかった。莉音といる時が、一番、安心するんだ。守りたいんだ。もう、後悔したくない。」

美央は、笑った。

「何を言っても、ダメみたいね？」

「時間が、ないんだ……。」

「あたし。昔のあなたが好きだったみたい。今は、もう、違う人なのね。」

独り言のように、呟いた。

「あなたと、赤ちゃん。育てたかったな・・・。」

「それは・・・。」

「いいの。嶺。もう、自由にしてあげる。」

美央にも、プライドがある。

「サインして、送るわ。あたしにも、プライドがある。親には、適当に言っておく。この子は、あたしが、育てるから・・・。」

嶺が、返事をしようと、する間もなく、携帯は、切れていた。間もなく、一通の、封筒が、届いた所で、面会の許可があり、莉音と、久しぶりの逢瀬という事になった。

「待ってた」

病室の戸を開けると、そう、あの日と、同じように、莉音は、窓際の、ベッドに、上半身をおこし、こちらを、みつめながら、笑みを、浮かべていた。

「足音で、すぐ、嶺だとわかったの」

あの夜の事なんて、忘れたかのように、莉音は、話かけた。

「嶺に、言わなきゃならない事、たくさんあって・・・。」

莉音自身隠していた、病気の事。もう、医師から聴いて、知っていると嶺は、笑って見せた。

「ばれちゃった？」

「うん。全部。」

嶺は、莉音の、隣の腰かけた。

「もう、嘘は、ない？」

「あるかもしれない。」

「何？」

嶺は、莉音に尋ねた。

「ずっと、一緒に居るって、嘘」

莉音は、答えた。目が、潤んでいた。

「一緒に、いようよ。」

嶺は、莉音の、手を、とると、ポケットから、小さい箱を取り出し

た。

「まださ……。高いのとか、買えないんだけど……。」

照れながら、莉音の、薬指に、はめた。小さいダイヤの入った指輪だった。

「俺。決めたんだ。ずっと、一緒にいるのは、莉音だって」

「だけど。あたしは……。」

生きられないよ……。そう言いたかった。

「いいんだ。やっと、なんだ。やっと、一緒になれるんだ。ほんの、すこしでも、時間を、共有したい」

嶺は、莉音を、そっと、抱きしめた。壊れ物を、抱くように……。いつの間にか、細くなった莉音の体だった。こんなに、彼女は、細かっただろうか……？

「結婚できるよ。莉音。俺達、堂々と、街を歩けるんだ。二人。祝福してもらえるんだ。」

「嶺。」

「やっと……。莉音。」

莉音の、薬指に、小さな小さなエンゲージリングが、気高い光を放っていた。

君に贈るドレス。

夏が、迫っていた。莉音の体調は、嶺と入籍できた嬉しさもあって、すこぶるよかった。何度か、病室を、内緒で、抜け出し、看護士に、叱られる程、元気になっていたが、やはり、時々、不整脈を、訴える事もあった。最大の心配事もあったが、幸せだった。周りに、祝福される事。何より幸せなのは、嶺と、一緒に居れる事だった。

「ねえ！」

莉音は、イタズラしたい気持ちでいっぱいだった。

「また、ぬけだしちゃいましょう？」

「また？」

「そう。今晚。」

「どこに？」

「お向かいの、教会で、今晚。お式があるの。」

莉音は、嶺を、みつめた。キラキラした綺麗な目だった。

「それでね」

莉音は、照れてた。

「見にいかない？」

病院の、反対側にある教会で、今晚結婚式があるという。莉音は、それを、見たいというのだ。

「ああ……。」

嶺は、思った。入籍を、済ませたものの。まだ、式らしい。式は、済ませていなかった。心移植が、落ち着いてからか……。体調が、落ち着いてからとは、考えていたのだ。

……本当は、ドレスが、着たいのか……

「最近。体調いいみたいだし。」

莉音は、言った。元気な特別な笑顔だ。

「花嫁さん。見たーい。見たいですー！」

莉音は、ふざけて、両手を挙げた。

「はいはい。」

嶺は、苦笑いした。ベッドの上で、莉音は、ピョンピョン跳ねそうなり、嶺は、あわてて、制した。

「まったく。連れて行くから……。」

「あのね。たくさん。したい事があるの。ドレスも来たいし。」
早口で、まくしたてる。

「それと、そう……。8月の、花火も、行きたいの。それが、無理なら、嶺の言ってた秋花火！秋花火を、見てみたい！」
まだ、とまらない。

「それと……。えっと……。子供も、たくさん。ほしい！」

「えーっ」

「照れないの」

「はいはい。お姫様」

両手で、莉音を、抱きしめた。

嶺は、返事しながら、ある考えが、閃いていた。

「それで、これなの？」

莉音は、うれしそうな声をあげた。しばらく、買い物に出て戻ってきた嶺は、莉音に、お土産と言いながら、紙袋を手渡した。おそろおそろ開けてみると、そこには、シンプルな白いワンピースが入っていた。

「サイズも好みも、良くわからないから。妹さんに、聞いたんだ。シンプルなワンピースなら、いいかと思って。それで」

嶺は、思いつきだらしない顔つきになった。

「一応、これも、用意したんだ」

ベールと白いバラのブーケだった。

「結構、恥ずかしかったんだ」

照れながら、莉音に、渡した。

「今夜。行こうよ。遠くから、みなながら、二人だけで、こっそり、式を挙げよう」

「うん」

莉音あり、頷いた。じんわりと、目が、潤んでいた。そして、嶺は、莉音の、額にかかるくキスをした。夜までの時間が、楽しみになった一瞬だった。

夕方から、シヨボシヨボと、冷たい雨が、降り出した。窓を、濡らし始め、事もあるつか、莉音の体調が、崩れ始めた。昼間、ハシヤギすぎたのか、ベッドに伏せて、起き上がれないくらい脈が、不安定になっていた。

「無理しすぎたかな……。」

息が、苦しい。胸も……。苦しい息の中、莉音は、反省の言葉を、口にし、恨めしそうに、空を見上げていた。

「今日の、お式の人達は、大変ね。」

見知らないカップルに、同情し、そう呟くと、うとうとと、眠りについた。この日から、莉音の体調は、日増しに悪くなっていた。白いドレスも、頭上に、飾られたままになっていく。夏は、そこまで迫っているのに、このままでは、楽しみにしていた花火大会も、病室の、窓から、見る羽目になりそうだった。

「もう、少ししたら、夏も、終わるのね」

哀しそうに、莉音は、言った。少しずつ、痩せていき、長い髪と色の白さが、莉音の、美しさを、はかなく映し出していた。

「もう……。」

嶺は、莉音の、いない病院の、屋上で、何度、悲しみを、こらえたか……。

「もう。時間が、ないのか……。」

時間が、そこまで、せまっていた、ドナーが、現れる兆しは、何処にも、なく。ついこの間まで、響いていた莉音の笑い声も、全くな

くなっていた。あるのは、苦しい息の、莉音の息だけだった。

「莉音・・・」

嶺が、眠りにつく、頬に触れると

「ねえ。嶺」

莉音は、うつすらと、目を開けた。そして、嶺を見上げた。最近、寝たきりの状態が多い。

「お願いがあるの」

「何？」

「一緒に、花火を見たいの」

「この夏のは、無理だよ」

「だめ？」

「だめ。ごめん。この体調じゃ。無理させたくない」

「遠くからも？」

「無理させたくないんだ」

莉音の、瞳が、残念がった。

「じゃあ！秋花火。頭上で、見たい。」

・・・無理だよ・・・と、嶺は、言いたかったが、言葉を、飲み込んだ。

「うーん。体調が、戻ったらね。」

嶺は、嘘をついた。

「約束」

「うん。約束」

莉音は、少しだけ、元気な、ふりをした。

「お願いがあるの。花火の時。ね？」

嶺の、腕を、握り締めた。

「お願い。その、服着て、行きたい」

莉音は、頭上のドレスを、指差した。

「だな。ブーケは、無理。恥ずかしい。」

「わかってるよ。」

「本当に、わかってるのかな？」

嶺は、笑った。秋花火まで、莉音は、持たないかもしれない。そう。不安な気持ちは、心の奥に隠したまま、莉音に、微笑みかけるのだった。

・・・本当に、莉音。君が、一緒に、見たいというのなら。叶えてあげよう・・・

嶺は、莉音の、願いを、叶えたいと思い始めていた。

・・・それまで、莉音。生きて・・・。

秋花火は、君と。

思えば、僕は、君との時間を、少しでも大切にすれば良かったのかもしれない。一緒に居る時間を大切に、大切に。逢っている間は、楽しくて、そんな事、感じる事さえ、なかった。何よりも、一番は、君を傷つけてしまった事。周りを、傷つけてしまふのを恐れ、僕は、一番大切にしなければ、ならない君を、傷つけてしまった。僕らの恋の始まりは、世間という不倫から、始まった。不倫と言っても、君は、花嫁になりたてだったから……。いや。やはり、そうなのかな。人の物だからね。（笑）

君と出逢わなければ、君は、普通にあの人と、生活を続ける事が、出来たのだろうか？僕は、美央と結婚し、子供をもうけ、新たに恋する事もなく、平和に生活したのだろうか……。結婚してしまえば、恋をする事なんて、ないのだろうか……。僕は、あの瞬間に、恋をしてしまった。出逢わなければ、良かったのか？それは、わからない。でも、僕は、莉音に逢えて、良かったと思う。それが、君も、同じく思つかは、わからないが。君への思いは、僕に力をくれた。今までに無い、エネルギーとなつて、僕を支えてくれた。人を、傷つけない恋なんて、あるのだろうか……。

莉音。僕は、君に逢えてよかったと思うよ。後悔するとしたら、もっと、全力で、君を愛し抜けなかった事。もっと、自分の気持ちに、正直に、君への思いを貫けばよかったと後悔している。周りを、傷つけずに、愛しぬくなんて、出来る訳が無いよね。あの時、もっとはやく、君を、奪えばよかった。君だけへの、気持ちで、行動するには、若さが、ほしかったよね。

やっぱり、夏の終わりの、花火は、みれなかったね。どうしても、秋花火を莉音は、見たいといって聞かなかった。時間が、せまっていた。ドナーが、現れていたとしても、心臓は、手術に耐えられないところまで来ていた。それでも、秋花火を、見たいと言ったんだ。

秋の終わりに見る花火なんだ。当然。山から、来る風は、冷たく、弱っていた君の体を痛めつける。莉音は、あの白いワンピースを着ると言って、きかなかった。寒いかもしれないと言って、来夏さんの用意したカーディガンを、羽織って、病院を、抜け出した。このまま、居ても、もう、二度と、花火を見れないと思ったんだ。莉音は、嬉しそうだった。また、前の元気な頃の、莉音に、戻っていた。秋花火を見るんだ。君と。いつか、約束した秋空に散る哀しい花火を。

「来年は、何してると思う？」

莉音は、僕の腕の中で、空を、見上げていた。音とともに、縦に横に火花が、散っていた。遠く山々からの、風は、冷たく晩秋を、知らせていた。

「来年も、一緒に居ると思う」

ふっと。莉音は、笑った。

「そうだよね」

「やっと。一緒になれたんだ。ずーっと、いつしよにいると思う」

莉音の、白い顔が、花火の明りで、はつきりと見えた。ああ・・・

僕の好きになった人の顔だ。よく、見ておこう。この瞳が、僕をよく、見つめていた。忘れる事は、ないだろう。この人と、出会って、僕は、本当に、人を、愛する事を知ったんだと思う。莉音。今、君は、何を、思っているんだい？僕と出逢って、君は、幸せだったんだらうか。

「嶺と、逢えて、良かった。」

僕の気持ちだが、届いたのか、莉音は、そう答えた。

「哀しい事も。嬉しいことも、全て、嶺からだった。でも。嶺が、あたしに、生きていく楽しさを、教えてくれたの。」

莉音の、瞳が、僕の姿を映していた。

「嶺。」

かすかに、睫が、震えていた。

「ねえ・・・。」

莉音が、甘えた声を出した。

「なんか……。疲れたみたい。寝てもいい？」

「いいよ。」

莉音の、目尻から、涙が、あふれていた。

「起きるまで、傍にいてね」

「わかってるよ。莉音。傍にいるよ。ずっと」

莉音は、目を閉じていた。目尻から、細く涙が、伝い落ちる。莉音の、僕に、触れている手が、少しずつ、冷たくなっていった。

「莉音」

白いワンピースが、まるで、花嫁衣裳のように見えた。

「綺麗だよ。莉音」

冷たくなっていく莉音の頬に、僕は、頬寄せた。花火の時期は、もう終わだろう。

莉音。僕は、君を、忘れる事は、できないだろう。花嫁姿の君に恋し、はじまった恋。君を愛する事は、とめられなかった……。

莉音。

君を永遠に愛し続ける……。永遠に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1327i/>

秋花火を君と。

2010年10月11日18時35分発行